

米人ザイル
以爲く、十
ニスンは思
九世紀の思
想及び情緒
を完全に理
解せしむる
なりと人

と詠じたりして、人生を悲観する如き歎聲を漏らしたりして居る。テニスは、進化論を知り、自然淘汰が普く自然界に行はれるものである事も知つてたが、自然界全體には明瞭を缺くこと多く、生物の運命の果して如何なるものなるやを知るに惑ひ、萬事が不可解なるを歎じ、結局、人は如何に惑ふても、正を正として行ふべきものだ、なぞ戒めて居る。こんな調子で、目的の上に目的を求めてゆけば、宇宙究極の目的如何は、到底、想像し得る範圍さへ、超えて居る不可解の、問題になるが、普通の人間である限り、シエークスビーヤの如く、テニスの如く、ロングフェローの如く、樂觀もしたり悲觀もしたりする間に、宇宙が部分的になりとも、眞、美、善に遷つて行きつゝあるのを認め、之が即ち進化であると考へて然るべきものだらうと思ふ。宇宙が從來經過した跡に就て稽へれば、退化が大勢であるものよりは、什麼しても思へぬ。之に反し進化であると信じて誤らざる所以の證明ならば、幾らでも擧げ得られる。

(第七章) 無限の連続

第七章 無限の連続

(第九十二節) 無限の連続

第九十二節 人間が、眞、美と善とを求め、今後も益々求めんとするのは事實である。然し、この三つの間に如何なる關係があるか、又、眞とは如何、美とは如何、善とは如何、この問題になれば、まだ充分に判明したとは謂へぬ。宇宙は廣い。眞、美、善以外に、尙ほ人間の進んで求むべきものが無いとも限らぬ。ただ、目下の人間が之を意識せぬのみであるのかも知れぬ。孰れにしても、目下の人間の求むる處のもの、皆斯の三者に關係がある。ただ之を人類の間に求むると、人類以外にも亘つて、廣い範圍の間に求むるのこの差を存するのみだが、さて、人間が之を求めて愈々得た如くに思つても、人間は又忽ち之に不満足を感じ、更に其上を望むやうになるのみならず、或人の眞を得、美を得、善を得たりとして居ることが他から觀へ、さうで無く思はれる場合もある。然らば如何にして、眞、美、善を求めたら、究極の眞、美

善に達するを得るだらうか、と今日までに種々の説を立てたものもあるが、假令、各種の説の間には多少一致した點があるにしても、之を説く人の場合、時代によつて十人十色互に相違して居る。要するに、今日の人間は、究極の眞、美、善に達し得られぬものである。

人の認識する處は、悉く皆連續性のもので、何を認識しても、それには前があり又後のあるものだ。連續とは何であるか、と云へば、或る關係を指すものに相違ない。關係が即ち連續でありとすれば、その關係を次から次へと辿つて行つて、之で行き止りだ、こいへる連續の絶えた絶對に達しやうと試むるのは、人性の自然である。然し、空間も無限、時間も無限であるとすれば、何處まで關係を尋ねて行つても、これで終末だ即ち絶對の無だ、といふ域があるべき筈のものでない。又、假りに無の域があるものとし、之れを出發點として關係を辿り、段々右の方の道に進んで來ても、これで終末で「この上あり得ぬ」といふ絶對の有にも達し得べきもので無い。故に、無限

(文殊菩薩) 三聖の一に
して如來の
右側に坐し
智慧を司る
と信ぜらる
(如來)佛に
對する十異
名の一
(毘盧遮那)
梵語ローイ
ローチャナ

が一方に於て無となり、他方に於て有となるべきもので、無限を認定しなければ、絶對の「無」もなく絶對の「有」もなく、凡て限りあるの「有」、限り有るの「無」である。然し、無限を認定して後に成り立つ「無」と「有」は、共に絶對であるから、何れも「無限」なる終末の域に達し、「有」即ち「無」だといふことになる。又世間には「無限」は決して經驗し得らるゝものに非ざる故、明瞭に意識せらるべき筈なく、ただ、或る邊に「カギリ」をつけて置いて、その「カギリ」の内にあるものを「有限」と謂ひ、その「カギリ」の外にあるものを「無限」と名づけて居るのだ、と説く者もある。或は爾うであるかも知れぬが、人間には、斯く不明瞭に「無限」を意識するのみを以て満足せず、之を明瞭に意識せんとする傾向のあるものだ。是は佛典「三身壽量無邊經」にある事だが文殊菩薩が如來に向ひ「何といふ佛から説法を聞いたか」、と問ふに如來は「妙覺地大毘盧遮那」に答へた。「そんなら其前は？」と問ふと「無始無終一心一念本佛」に答へた。又「其前は？」と問ふと「無心無念本佛」に答へた。重ねて又「其前は？」と問ふと「佛陀

にして光明
遍照の意
法(三身)
身、知身、
色身等の三
種の佛身
(十界)地獄
界、餓鬼界、
畜生界、阿
修羅界、人
間界、天上
界、聲聞界、
緣覺界、菩
薩界、佛界
等の迷悟の
階級

(第九十節)
三節)絶對
的知識の不
可能
美術に於て
も千九百二
十年以來佛
國に來派な
るもの起り
運動の連続
を取扱ふ

なく前佛もなく後佛もない、無心無念本佛は其體が實に不可思議で、何處から來たでもなく何處に行くでもなく、三身の屬性もなく、十界の屬性もない」三答へた、と傳へられるが、要するに、人の認識する處は悉く連続性で、その關係を辿つてゆけば、不可思議の「無限」に歸着するものだ、との意である。ライブニツツとニュートンとが同時に發明した微分積の學が、運動を連續して取扱ひ、之を實地に應用して誤たざるのに徴しても、宇宙の事は何に限らず連續性のもので、結局「無限」に歸省せねばならぬものたるを證明し得て餘りありといふべしだ。

第九十三節

幾何學では、點の連續せるものを線とし、二點を聯ぬるこゝによつて線を得らるゝものとし、二線を相横切らする事によつて點を得るものとして居るが、二線は一箇所に限らず、何處でも横切ることの能きもの故、二線を相横切らすることによつて得らるる點は、無數である。又、線は點の連續せるものなりとすれば、その何れの箇所も起點となり得るものだ。恰度、それと同じやうに、宇宙を無

限の連續であるとするれば、或る人の意識した或るものを基礎として、一切の事を推して行けもする代りに、他の人の意識した或るものを基礎として、又一切の事を推して行かれもするわけになる。故に世の中には、こればかりで推して行かねば宇宙の事は解らぬ、と謂つたやうな唯一の統合法も無ければ、又、永遠に動かすべからざる統合法も無いのである。誰でも、比較的にも眞、比較的にも美、比較的にも善、比較的にもする所のものを定め得るにしても、是より更に眞、更に美、更に善なるものが無いとは限らぬ。多くは或る程度の眞、美、善で、後世に至るか或は人が變れば、さらに進んだ眞、美、善に達し得られるものだ。されば、自分の是認した處を究極の眞、美、善なりとして、萬人が萬人永遠までも總て之を是認せねばならぬものと強ゆる如きは、知識の進歩を停止しやうとするのも同じである。自分が、萬世に亘つて動かざる究極の眞、美、善に達せんとするを期するのは、努力の動機としては結構だが、斯るこゝは望んでも得べからざることだ。人は何れも皆、無限の連續の一部を分擔し、その範

園内を彷徨して、之を知り得るに過ぎぬものである。随つて、知り得ざるところが多いからとて懊惱する必要もない。或る時代に於て知り得る程度の眞、美、善を、我が全力を盡して求めさへすれば、それで可いのである。

曾て最も微細なるものとせられた原子も、今日では電子より成つてゐるものである。知られるに至つたやうに、將來は電子も更に他の微細なるものより成つてゐることが明かにせらるゝやも知れぬ。又、今日に於て最も大なるものもせられてゐるものは、銀河を以て限界とする可知的宇宙であるが、將來は銀河の限界外に、他の宇宙が無限にあつて、更に無数の宇宙を總括する大宇宙、また無数の大宇宙を總括する大々宇宙のあることが知られるやうになるやも知れぬ。斯くして、空間は、大小共に無限で、無限より無限に至る無限の連続だといふ事になる。又、時間も空間と同じく無限の連続で、今日の宇宙を、それからそれへと過去に溯つて行けば、結局、無限に歸着せねばならなくなる。又、今日の宇宙を、將來に向つて考へて行けば、假令、その間に新陳

代謝があるにしても、矢張、結局は漠となつてしまつて、無限だといふことになり、過去の無限より將來の無限に聯なる無限の連続が、是れ時間だといふことになる。

かく考へ來れば、大にせよ小にせよ、孰れに於ても、人間は絶対的知識を得られるもので無いのだ。今日の所謂絶対は、或る物と或る物とを比較した時、即ち相對に對しての絶対で、更に上の絶対に對しては、相對になつてしまはねばならぬものだ。又、今日の所謂相對の下にも相對があるから、下の相對に對しては、上の相對は絶対になる。故に、究極とせられたものも、其時代その人に於ける究極で、無限の連鎖中にある一鑽たるに過ぎぬ。知識の進んだ人、或は知識の進んだ時代になれば、それは究極でないことになつてしまふものだ。

諸科學の進歩は、この無限の連鎖を追ふに過ぎぬもので、少しでも従前より確實になつたならば、これにより認識し得たる處は、従前より進歩したものだとして満足するより、致方が無からう。自然科學の總てが、相對的知識なるに満足せず、別に絶対

を求めて究極的知識を得んとする學者が無いでもなく、又之を得たりと稱する者もあるが、その所謂絶対的知識は其儘に相對的知識となつてしまひ、之により推理を餘儀なくせらるゝ場合の多いものだ。故に認識に關する研究さへ進歩すれば、絶対的知識を得られるものだ、なぞと思はず、人は須らく凡らゆる科學を進歩さする事に努力すべきである。今後、各方面に亘る知識が、凡て科學となつて顯れるやうになり、各科學が進歩しさへすれば、今日不明なる無限の連續中の部分も、將來は明白になるだらう。

第百九十四節

從來の經過によつて考へて徴ると、初め關係なしとせられたものが、後に至つて關係ありとせらるゝことになつて居る。無機物と有機物との關係の如き、地球と星辰との關係の如き、昔は知られて居らなかつたものだが、今日では誰かて、相互の間に密接の關係あるを認めぬわけにはゆかぬ。將來、近き星に就ての知識が、地球に關する今日の知識の如き程度にまで進歩し、遠き星を知ること、今日の日

(第百九十四節)
大徴、大愈

月を知るが如くになりでもしたら、假令なほ不明瞭のこまが多かつても、宇宙が大なる機關として運轉することが明瞭になり、意識と無意識との關係も、今日の如く曖昧ならず、明瞭に知らるゝに至るだらう。又、現に人間は、眞、美、善を求むるに汲々として居るが、この區別は永遠に存せらるべきものでないのだ。恰も有機無機の限界が撤廢せられたやうに、將來は撤廢せられてしまふものだらう。又、今日までの人間は、宇宙の目的は、眞、美、善に達するにありとして居るが、之れは人間の迷ひで、宇宙は、今日までの人間が想像する處と、全然異つた方に進んで行つてゐるものであるやも知れぬ。その邊のことは、素より今日の人智で知り得る限りでないが、何事も他と何等かの關係を存するものたること又は、疑ふべき餘地が無い。されば、赤色の下に熱の振動があり、紫色の上に化學線の振動があつて、それが視官に感じなくつても、熱と七色と化學線との間には、離すべからざる振動上の關係がある如くに、今日の人間は眞、美、善以外に求むべきものを知らなくつても、何かこの三者の外にも

知られざるものが宇宙にあつて、それ、眞、美、善との間には、離すべからざる關係があるだらうと想像し得られる。

今日の人間は、到底、大小共に眞の究極に就て知る能はず、無限の連続中の一部たる小は電子、大は星系を限りとする間の階級や活動などを研究して居るのであるが、それでも、この間にあるものは、總て無意義に排列せられず、生物に意義ある如くに意義あり、生物よりも複雑であるだけ夫れだけ、其意義が豊富のものであることを知り、可知的宇宙が、生物以上の超越的生物である事を、認めかけんとしつゝあるのだ。今日の百科學は、各科の進歩が不揃で區々たる爲め、相互の聯絡を缺き、宇宙を如何なる物として取扱ふべきかに就き、一致した論斷を下し得ぬが、最早宇宙を、生物よりも單純なる物として取扱へぬことになつて居る。人生を其一微分子とする宇宙の活動は、人生よりも遙かに微妙なものであらねばならぬ筈であるからだ。人の眞とし美とし善とする處にして、若し人の全力を盡して求むる處なるべくんば、人を包容する

宇宙は、更に人にまさる大規模を以て、眞、美、善に向かつて進みつゝあるものと考へるのは、當然で無いか。人類は、地殼の變遷に伴つて生じた一現象で、絶大なる宇宙と比較し得ぬほご小なるものであるにしても、既に宇宙と密接の關係ある以上は、斯く考へて、一を以て他を測つても、差支のない筈だ。加之、宇宙も亦人生と同一意義を有し、併も其意義が大規模のものであるとすれば、人間は宇宙と一體ならねばならぬものだ、と教へ來つた古來の教訓や詩歌に新たなる意味のある事をも覺り得られる。然し、宇宙は無限の連続である。人間は如何に努力しても、今日之が究極に達し得べきで無い。されど、又今日只今の一些事も、前後に連続せずして起るものでは無い。随つて、今日只今の一些事をすら、人は決して輕視してはならぬといふ事になる。如何に眞と美と善とに近づかうにしても、人は時代と國情とに限られるものである、のを理由とし、無限の連続の一部たる現代を輕んじ、延いて宇宙をも、輕々しく考ふるに至るなどは、以ての外の事である。古往今來の大勢は、歩一歩、宇宙に

人生以上の意義あるを認め、この意義ある宇宙と離るべからざる關聯ある人生にも、從來の人々の考へて居つたより遙かに大なる意義ある事を、明かにせんとしつゝある。人と宇宙とが一體で、宇宙の生活即ち人生なりと考ふるに至つてこそ、人生も初めて大なる意義を有するものになれるでは無いか。

(第八章) 連
續の一部
(上)

(第百九十
五節) 知識
算術級數は
幾何級數と
等比級數と
も稱せらる
數學上の連
續式に及は
算術級數の
外幾何級數
の式あり諸
氏あり
Fibonacci
Cayley
Stainville
Leibnitz
Fouries
Heine
Lambert

第八章 知 識

第九十五節

宇宙は、上に向いても下に向いても連続ばかりで、一たび連続を追へば其の達する處を知らず、小なるに限りがなく、又大なるにも限りが無い。一時、限界らしく見えるものがあつても、忽ちにして取拂はれてしまふのが常で、人間は無限の連続の一部に於て活動し、無限の連続の一部をのみ意識し得るに過ぎぬものだ。然らば、その連続の様式は如何なるものか、云ふに、これも、種々ある。一々列挙するわけにもゆかぬほどのものだが、今日までにも、既に多少判明して居る連続の様式が無いでもない。就中最も普通で、いろいろある連続様式のうちにあつて主要なものだ、と思へるのは、(一)算術級數の法によつて、二―四―六と、謂つたやうに、二―なら二といふ或る一定の量が加はつてゆく進み方と(二)幾何級數の法によつて、二―四―八―十六と謂つたやうに、或る一定の量が乗ぜられてゆく進み方とである。然し

右級数の如
何なるもの
なるや氏は
リスタル氏
代數學に詳
説せらる就
て参照せよ

(バナナ)芭
蕉の果實

(ターロー)樹
脂

フキボナチ
は十四世紀
の伊太利の
數學者に
て有名なる
カチオのボ
ナチの子

人間の關係する處は、却々複雑ゆえ、天上天下のこと一々悉く之を數字で明示するわけにもゆかぬが、何事にせよ、増進するか、減退するか、増進、減退共にせずして停滯するか、三つのうちの一つに出でぬものにては無い。

熱帯の南洋あたりにある離れ小島で、他一切交通せず、バナナやターローを食つて、碌な家にも住まはず生活して居る人間は、子々孫々同じ事を繰返し、二に次ぐに二を以てし、永遠までも二—二—二で連続してゆくばかりだ。之に反し、温帯の或る地方にある人間は、假りに各代同量の力を有するものにして、代の替はる毎に、家を建て増したり城を築いたりして、後の代は前の代よりも何事によらず増加し、算術級数の二—四—六の割合か、或ひは幾何級数の二—四—八の割合で増進してゆくものだ。中にはフキボナチ式(Fibonacci's series)によつて、二—一—三—四—七—十一—十八といふ如き割合で、直ぐ前に經て來た二順序に於ける量を加へた割合で、連続してゆくものもある。近代に於ける文明の進歩の如きは、算術級数の様式によるとい

ふよりも寧ろ幾何級数の様式によつてゐるらしく、殊に一定の乗比数は二でなく四で、二—八—卅二—百廿八—五百十二の進み方だとして觀て、差支ない如くに思はれる。

然し、世の中の實際は、増進するばかりのものとは限らぬ。減退することもある。旱魃、蟲害、飢饉、濫伐、洪水等によつて、國力の疲弊することがある。かくして國力の疲弊して居る處へ、他國から軍隊が襲來でもすれば、下世話に謂ふ「泣つ面に蜂」で、遂に其國の衰亡となつてしまふものだ。曾て西亞細亞に興つたカルデア、バビロニア、猶太等の諸帝國の衰亡したのは、概ね皆な、この經過を辿つて居る。又、兵力強盛で、商業だけは進歩しても、知識の停滯したり、或ひは退歩したりした邦が無いでもない。秦の始皇帝が西紀前二百二十二年に儒生を坑に埋めたり、書を焼いたりしたのは、假令、當時兵力が充實して居つたにしても、知識の進歩に多少の障害を與へたるに相違なく、又、西紀前四世紀より三世紀に亘り埃及のアレキサンドリア府を支

始皇の三十
四年李丞相
上書して曰
く「諸生今
を師とせず
び以て當世

を請ふ秦記
臣請ふ秦記
に非るもの
は皆な焼か
る者は今を
以て今を講
る者とは皇
之を可とす
アレキサン
ドリヤ管區
司教の名は
テオピルス
(戰略)作戦
地帯に於て
敵の在らざ
る地域に軍
を動かす方
略
(戰術)敵と
接觸して之
に勝つ方法

配したプロレミウス二世(西紀前二八)によつて大成せられ當時文化の淵源を以て目せられた蔵書七十萬卷のアレキサンドリア圖書館の一部が、西紀前四十八年シーザー(西紀前一)の率ゐる羅馬の軍勢によつて焼かれ、次で其蔵書の大部分が三百八十九年(〇〇年生)の率ゐる羅馬の軍勢によつて掠奪散逸せしめられ、更に六に至り、アレキサンドリア管區の耶蘇教會司教によつて掠奪散逸せしめられ、更に六百四十年に回々教貫首オマー二世(五八二)の率ゐる亞刺比亞軍により、全書庫を擧げて焼き拂はれてしまつたことなども、多少知識の進歩を害して居るに相違ない。總じて戰國の時代には、戰略、戰術、築城法及び武器の進歩等はあるが、文明の他の點に於ては却つて退歩するものだ。歐洲の中世紀が即ちそれで希臘時代よりの文明を繼承しながら、アレキサンドリア圖書館學林のアリストタルクス(西紀前二八)が教えて置いてくれた地球の圓いことも何も忘れてしまひ、文藝復興期に至る一千年間の歐洲は、その文運が遙かに希臘時代に劣るものになつて居る。近世に至り、各般の事物は、大に進歩したが、その進歩は跛で、大に進めるものもあれば、又甚だ遅々たる進歩のものもある。中には、星占學の如く、前世紀の初期までは、獨逸の數學者で天文學者であつたプファフ(一七六)が、星占書を著はしたほどで、殘存して居つたが、今では殆ど亡びてしまつたといふやうな學科もある。

(第九十節)知識の増進

墨西哥は近
世に於て西
班牙人フェ
リナンドによ
り一千五百
十七年に發
見せらる

第九十六節)かくして、人類の知識は今日までの間に於て、停滞したことも、又、減退した事もあらうが、過去に據つて將來を卜すれば、大體に於て、増進するものと觀て差支ないのである。一時衰退しても、それは後期に起る進歩によつて優に補はれて居る。又、埃及の文明などは滅亡してしまつたが、それでも、希臘に傳はつて後世を益し、希臘の文明は羅馬に、羅馬の文明は近世の歐洲に、近世歐洲の文明は、東洋に傳はつたのである。それから又、歐洲でも中世紀には知識の停滞若くは減衰したこともあつたに相違ないが、これとて近年に於ける長足の進歩によつて、優に償ひ得て餘りがある。十六世紀に於て西班牙人によつて發見せられた時に、其地にあつた堂々たる石造建築及發達せる彫刻等によつて歐洲人を驚かし、既に六百六十年には

なる。又、知識慾を満足さする材料の多い時代には、假令、知識慾の分量が他の時代と同じでも、恰も、三越あたりに行つて美しいものばかりを目にすれば、之れを買ひたいこの氣を起すやうに、知識慾が自然興奮して、知識の進歩も顯著になるものだ。但し、人により時代により、知識を欲しても得られる者と、得られぬ者との別がある。

猶又、前代のもものが、幾分なり後代に遺つて傳へられるものすれば、假令、人の能力が各代同じであつても、後代は、前代よりも勿論進歩したものになる。況んや、能力も代を追ふて進歩するものとすれば、進歩の速度は、代の加はる毎に益々速くなるべき筈では無いか。少數に就て謂へば、今日の人でも到底及び得ぬ如き傑出せる人物が古代にも在り、又、今日とて古人に劣る劣等の人間が無いでもない。然し、大體の上から觀れば、自然淘汰は争はれぬもので、中流に於ては、漸次優者が劣者に代るやうになつて來てゐる。隨つて、時代を経過すると共に優者の數を増加し、知識は

(第九十七節) 知識の増進を要す

自ら増進するわけのものである。

第九十七節

人の生涯は無限より無限に至る連続の一部たるに過ぎぬが、大抵の場合ならば、同一事を繰返してはならぬ。前人の傳へて呉れた處に、何か新しいものを加へて、之を後世に遺すべき筈のものだ。この新しい何かを、前代より傳へられたものゝ上に、付け加へることの能きぬやうでは、如何に後代の人でも前人より能力の劣つたところがあり、増進的連續の連鎖外にあるもの云ふべきである。知識には素より種類が多いから、萬人が萬人まで、何事に於ても前人より優るといふわけにはゆかぬ。然し、或る知識に於て劣つても、他の知識に於て優り得らるべき筈のものだ。又、前代の意見を繼承した丈でも、悉く之れを理解して後代に遺す事にすれば、優らぬまでも、劣る處が無い事になる。況んや、或る種の知識に於ては前代を繼承したのみに過ぎぬとしても、他の種類の知識に於て前代に優るものがあれば、文明は決して退かぬものだ。否、屢々乎として進むことになるものである。哲學の方面に就て觀

グリーン著
一八八三年
版一八八三年
ゴメナ・プロ
ウ・ヒジツト
ヴント中の認
識論は實體
視念を重要

第五篇 實 際

るに、或る部分に於ては、今日でもカントの時代より優れて居るとは思へぬ。英國の哲學者グリーン（一八三）の如き、カントの認識論より出發して、生理的解決を認識論の上に與へんと試みたが遂に能はず、再びカントの認識論に還り、「人間其ものは生理的條件より峻別せらるべきものだ」など、と云つて居る。然し、今日の科學はカントの時代に比すれば、非常の進歩で、その結果は、今日の認識論の上にも現れて居る何れにしても、苟くも人間として生を此の地球に享けた上は、須らく先人の遺して呉れたところに満足せず、之に何かをつけ加へて、更に之を後人に遺すことにすべき筈のものだ。たゞ前代から傳はつたものを繼承し之に安んずる丈では、人生が全く無意義のものになつてしまふ。初めから、生れて來ぬ方が優しだ、くらゐなものである。時代の進むと共に、前代のものに新しい何かを加へて後代に傳へてゆくのが、今日の見解からすれば、人間の健全なる行爲である云はねばならぬ。

人の行爲は、何れの時代に於ても、連續の一部たるに相違ないが、前代より傳はり

ペーコン以
爲く、眞を
知る者は眞
のみと

し處に、何か新しいものを加へて後代に遺すものこそすれば、知識は代の進むと共に愈明白になり、前人の知り得ざりし處を後人は知り得るわけになる。然し、これと無限の連續の一部でありとすれば、人は素より何れの方面に於ても究極の知識に達し得らるべきものでない。かくして無限の連續を追ふては、人類が地球上より絶滅してしまはぬとも限らぬ。されど又、人類の知識が、今日の速度で進むものこそすれば、絶滅するに先だつて、人類も其生存の意義を完全に了解し、絶滅の決して意に介するに足らぬ所以を、覺るやうになるものかも知れぬ。孰れにしても、人類なるものは、常に連續の一部を追ふてるのであるから、夫から夫れへ眞を求めて止まず、その眞を求むる事が又人類心意の常態で、此くせざる者は、常態を逸したるものと見做して、差支ないのである。

(第九章)連
続の一部
(上)

(第百九十
八節)美感
の増進

第百九十八節

「知識の進歩」は「真に近寄る」といふ意味である。然し、同じく真に近寄るにしても、其の近寄り方に階級がある。狭い範囲に於てするものもあれば、広い範囲に於てするものもある。狭い範囲に於て真を求むるものは、工匠が規矩を用ひて誤謬なきを期せんとする時の如く、無意識的若くは半意識的に真に近寄るのであるが、広い範囲に於て真を求むる者は、科學者の如く有意識的に真を知らんとし、苟くも及ぶところは遺す處なく攻究し、以て真に近寄らうとするものである。又、同じく科學でも、その専門々々によつて、真に近寄る範囲及び順序に差がある。孰れにしても、真を求むるの手段とするか、或は之れを主たる目的とするか、關係範圍の狭いか廣いかの別こそあれ、兎に角、種々の方面より相前後して真に近寄り、そのうちに、自づと前代よりも廣い範囲に於て、一步或ひは數歩進んで真に近寄る事となり、

茲に知識の進歩を生ずるのである。以上は、知能の、真に對する關係であるが、感能の美に對するや、又斯の如きものがある。

人間は、大抵、故らに無を求むるやうな事をするもので無い。無意識的若くは半意識的に之を求めつゝあるのが常態だ。時には、美を求むるのが、主旨で無いのに、却つて意識的の美を求めて居るやうな場合もある。假令ば、建築に於けるが如き即ちそれで、建築の主旨は、之に居住するに或ひは神佛を祀るとか、の爲めであるが、人は之を美しくして、美に近寄らんとするものだ。其他、日常生活に於て認めらるゝ美は、之に他の趣旨をも混するので純粹の美では無いが、藝術家は藝術によつて、専ら美のみ求め、之に近寄らんとするものである。かく、藝術家と普通一般の人の間には美を求むるの熱心にこそ相違あれ、又その範圍の階級に差こそあれ、共に美を求むるに至つてや一なりである。美しい草木や昆虫や鳥や獸を賞するもの之が爲めである。人類が記録の無い有史以前の時代より、孜孜として美を求めて居つた事は、晩くも今

(藝術)或る
人の求めて
得たる美を
具體的にせ
るもの

第四紀系は新石器時代の後、期層にして、沖積層と洪積層とに分れる。人類の出現は、ヨーロッパに現れ、より第三紀よりなり。

佛國翰林院會員ライナツハによれば、第四紀系は、時の原野に、如く刺戟の強き色彩を好み、其の遺跡、ピレネ山脈等に、発見せらる。

(必要)生命を繁く爲め

より一萬二千年前に、地球表面の地層であつたもの、と地質學者によつて判定せらるる第四紀系に當る佛蘭西の南部ドルドンニユの支流に沿ふて発見せられた洞窟の壁に、馴鹿の繪などが刻られてあるのによつても、之を知り得られる。又、現今の野蠻人が、裸體で居りながら、猶ほ身體を角や貝や花で飾つたり、茅屋にも幾分の裝飾を施し、笛を吹いたり、弦を鳴らして絃樂然たるものを奏したり、又相集まつて鬼神の物語たりに夜を明かしたりするところを徴ると、文明人の眼よりすれば、外見こそ甚だ粗野なれ、如何に野蠻人の間にも、美を求むるの念が盛んであるかを、窺ひ得られる。併も、時代の進むと共に年々外見にも美を加へ、それが重なり重なりなつて大きな結果になつてゆくのである。普通の器具は、始め必要に迫られて製造したものであるが、是れとても、時代の進むに従つて、愈よ美を加へて居る。製造場や船車に蒸汽機關の運轉するのは、素と實用の爲めであるが、其の均整を保たせ配色に工夫を凝した處に美がある。戰艦の如き、その用途から云へば、殺人器たるに過ぎぬが、その構造設備等

帝國軍艦扶桑は三萬六千噸に砲八門を有す其厚甲の最も十二時

ハルトマンは種々の美に於て、顯現せらるる、究極の不可解なる神秘の趣あるに非ざる物なしと

第九節 藝術の進歩

には美を加へてある。大砲を保護する爲めに掩堡たる白く塗つた圓塔の下から、同じく白く塗られた大きな砲身が、ヌツと突き出て居る處は、美しいものだ。マツチの如き些細の品にさへ裝飾を加へ、人は美に近寄らんとして居る。一錢に十個の駄菓子をも、人は美しく製造せんとして銳意する。畢竟、皆な人に美を求むるの念があるから、此の種の美をハルトマンは、初等形式美と稱して居る。又、此る初等形式美の中には、必要に迫られて作つた形式が、偶然にも、美の形式となつて居るものもある。假令ば材料を多く、費さずして製作物を堅固にする爲に、之を「ハ」形にした巴里のエーフェル塔だとか、或は又、西洋形の門のアーチ(Arch)などに美あるが如き、即ち夫れである。必要に美に近寄るのとを兼ね目的とした製作物のうちには、この二つが相半するものもあれば、又、孰れか他より勝つて居るものもある。

第九十九節 人の製作する處のものは、何によらず時代を經過するに共に漸次其美を増して來て居るが、就中、之を製作するに多人数の力を要し、且つ出來上つた

(エー)フエ
ル塔)千八
百九十九年
佛國技師エ
設計せるも
の設計せる
サ九百八十
五尺の鉄骨
建築
穹窿形をな
すアチは
材料を經濟
的に使用する
る形式なる
り證明し得
らる

埃及金字塔
の建築材料
たりし石材
一個を運搬
するのため
千人の人力

を三年間使
用せり又日
光東照宮の
建立に要せ
し延入員は
一十萬人と
傳へらる
英人リッ
アムモ
リス以爲
術は建築美
が爲にあり
も編傘も天
幕の小規模
に發達せし
(阿房宮)阿
房は地名な
り阿房に作
りしは全宮
の前の西五
丈、南北五
歩、上に萬

上で衆人の眼を惹くものは建築である。人の住居する爲めか、或は神佛の類を祀る爲めのもので、元來は便利を計る設計にさへすれば、それで事足る筈であるべきなのに、何れの時代に於ても、構造と塗飾とに苦心を凝らし、後代人は前代の遺した建築よりも、更に一層之を美なるものたらしめんしその様式に種々の改良を加え、支那の家屋の如き、始めは天幕形のもので、蒙古人の天幕より發達したもの(英人タリ)と觀て差支なからうが、發達は恐ろしいもので、天幕が遂に秦の始皇帝の造營(西前二)せられた阿房宮の如く規模の大なる美しいものとなつたり、又隋(自西紀五八九年)の煬帝が築いて(西紀六〇)離宮に宛てた樓閣の如く、珍奇の材料を寄せ集めたものになつたりして居る。然し、何れも波斯の建築と等しく木造であつたから、殘存せるもの少く、後人の參考になる其頃の建築物は甚だ稀である。希臘の建築は、バビロニア及び埃及の法を傳へて大に進み、或る點に於ては、この上の進み方はあるまいと謂へるほごだが、羅馬は希臘を模倣して更に異なる方面に發達し、道路及び橋梁の建築に於て希臘を凌ぎ、又、希臘の建築が主として直線を配合せしに對し、圓形を活用し、其極口

一、マネスク(Romanesque)の新建築様式となり、のち羅馬帝國が亡んで、ゴート人種
の思想を繼承した獨佛人が勢力を振ふやうになつてから森林の形を模型にして案出し
たのだらうと傳へらるゝ、圓周の一部たる弧を弧を組み合せた形狀の尖圓形を主と
するゴシック(Gothic)式建築が、十二世紀の初め頃(巴里附近のモリアンワルに當
時の遺跡あり一千一百十五年の建築にかゝる)より行はれて、又新しき美を建築に加
へ、續て文藝復興期に入るや、ゴシック式建築は堅牢で無いといふので、希臘式とロー
マネスク式とにゴシック式とを配合し希臘建築に於ける如き無裝飾の柱を用ひる巖丈
閑佳のルネーサンス(Renaissance)式建築が、十五世紀以來(最古の遺跡は伊太利のフ
ロレンス寺院にして一千四百六十六年の建築にかゝる)行はれ、この式の名工として、
伊太利ヴェニスにパラデオ(一五一)年、巴里ルーブル宮西南殿の設計者たるレスコー
(一五四)年、倫敦聖保羅寺院の設計者たるレン(一六三)年等現れ、愈よ其様式に美を加へ、
(六年生)

人を坐せしめ下に五丈の旗を建つるを得たりと傳へらる

今日に至つて居るが、現今では又、鐵骨を用ひて五十階七百呎の餘に達し、四百八十尺を計上する埃及の最も高い金高塔を凌ぐ紐育メトロポリタン生命保險會社の塔の如きものもあるほど故、この新傾向が近き將來に於て、一層の美を發揮して、セセツシヨン (Secession) 式以外に、特種の様式を現はし、人は建築によつて一層美に近寄るやうになるだらう。彫刻や繪畫は建築に比すれば、必要の分子少く、美感の爲にする方の多いもので、全く美感の爲にするといふも、敢て不可なきほどだ。支那には、古くより、銅板や石板に文字や繪畫を彫る術行はれ、木や象牙の細工などもあつたが普通の意味に於ける彫刻の美しいものは見當らぬ。日本には推古天皇 (西紀五九) の朝以來、佛像彫刻が發達して居るが、大理石の如き目の細かい石材に乏しい爲めに木又は金屬を材料にして居る。又、麻布を心とし之に漆液を塗つて製作した乾漆像 (奈良東大寺法華堂の梵天像) や、奈良東大寺戒壇院の四天王像 (天平時代の作と傳へらる) の如く粉糖を心とし水乾質の土を塗つて作れる塑像にも、非凡の傑作がある。パピロ

なる懸空閣を築き倫敦に五倍する主の四圍に三十八の塔を築き、その城壁を五呎厚にせり

ニア人種や希臘人には、彫刻に於ても秀でたところがあつて、佛國のルーブル宮に藏せらる「翼のある牛」や大英國博物館に藏せらる「浮彫なごは、アツシリア時代の傑作を以て目せらる」を得べく、又希臘の彫刻家フキヂヤス (西紀前四) の名は、今日に至るも猶ほ神聖視せられ、ミローの美神像やラオコーンの像 (希臘風を繼承せる羅馬人の作) の如き傑作が、希臘彫刻の遺物として、今日に傳へられて居る。文藝復興期に入つてからは、又彫刻の鉅匠としてミケランゼロ (一四七) が伊太利のフロレンスに現はれ、フキヂヤスを凌ぐに足る如き製作物を遺し、殆ど空前絶後の名聲を恣にして居る。フロレンスの學士院に所藏せらる「ダビデの像」などは、其遺品中の優秀なるものである。かくして、彫刻はミケランゼロを以て、進歩の絶頂に達し、以後進歩せぬか、といふに爾うで無い。其後に及んでも、獨逸ミウニツヒの王宮を裝飾したシユワンターレル (一八〇) や、佛蘭西國立劇場にあるウオルテイル (一六九四年生) の像を製作したフードン (一七四) や、一千八百六十年に竣工した英國々會議事堂の建築を設計

耳義和蘭瑞
西等に居住
したリシヤ
ト人種ナリ
大帝もゴ
式(ゴ)シツク
て千二百五
頃より千五
百年頃まで
主として東
は東東東東
の門東京女
學館等の建
築は日本に
於ける教會
外唯一の建
シツク式建
築にして地
震多き本邦
に不適當の
建築式なり
三越呉服店
新館はルネ
サンス式
なり

したバリー(一七九)や、巴里國民公園に建立せられてある「共和國の凱旋」を彫刻したダロー(一八三)や、近頃評判の佛人ロダン(一八四)などが現はれて、各々特色を發揮し、従前の鉅匠が考へ及ばなかつた方面より、美に近寄らんとして居る。繪畫は西漢の文帝(西紀前一七)が未央宮承明殿の壁に繪を畫かしたといふほどで、古くから支那に行はれたものだが、古代には傑出せる作物なく、唐の佛畫師吳道子(西紀八世)や、日本の巨勢金岡(西紀十二世の初め)なきの畫でも、評判の高い割合に、優秀の作物なりとは謂へぬ。雪舟(永正三年西紀)は、明に渡つて師を求めたが、師とすべき者なく、ただ彼地の名勝を周歴して之れを師とし、其技能に彼の地の人々を驚かし、遂に明帝の命を受け禮部院の壁畫を畫いたほどのものだ。畢竟、當時支那には名工のみならず古い名畫も無かつたからの事だらう。明治の畫人狩野芳崖(明治廿一年西紀)や橋本雅邦(西紀一九〇九年歿)やなきは、古來名匠の譽れ高き狩野探幽(西紀一六七四年歿)に優ることも劣らぬ。以て如何に繪畫が、古代に於て發達の遅遅たりしかを知るに足るべしだ。

(ル)トブル
宮)大成せ
しは十七世
紀末にして
日下は古て
美術品の充
列館に充て
らる

(セ)セツシ
派の意なり
千八百九十
八年奥太利
アカデミ
展覧會の審
査に不平な
る美術家の
一派分離し
て新に展覧
會を起せる
より此の稱
あり主とし
て直線を用
ひ東洋趣味
を有する建
築に於ては
鐵骨及び鐵
筋建築に適

古代希臘に於ての繪畫は繪具の乏しいかつた爲に、彫刻ほどに發達するを得なかつたらしい。然し、亞歷山大帝の頃には、相當の發達を遂げて居つたらしく、其遺品中の二三は伊太利のネーブルス博物館に藏せられてある。又、羅馬時代の遊覽地であつたボムペイの市街が、七十九年ヴェスヴウス火山の噴火によつて埋没された當時の建築物は、一千七百五十三年以來發掘せられたが、其壁にある繪畫は近世に起つた印象派の風に似て居つて、軟かいところがあるからとて、切りに賞める者もある。然し、一方には之れを貶すものもある。孰れにしても、希臘の繪畫は、彫刻の下位にある。されど、其後、文藝復興期に入るに及んで、まづ、初期に於てフロレンスにギオット(一三〇七)現はれ、人物畫を活動的のものとするに力を致し、更にホッチチエリ(一四〇一)現はれ、畫面を一層理想化するに努め、次でミケランゼロ、ラファエロ(一四八)等の巨匠現はれ、近世に至つても、象徴主義のピウヅキ・ド・シャワンヌ(一八二四)・裝飾的の價値ある作物に堪能であつたロトランス(一七六九)・得意の田園畫に神韻を發

應せりとせ
らる
周代の遺品
にて紋様及
び人馬の模
様を浮彫に
せるものあ
り

聖武天皇の
朝の佛師鞍
作止利の作
と傳へらる
る金銅佛大
和法隆寺に
あり

(東大寺)聖
武天皇の勅
願により建
立せらる

パピロニア
人種がアツ
シリア帝國
を形成せし
西紀前千二
百五十年乃
至六百二十

揮したミレー(一八一四)、崇高の畫風あるワッツ(一八一八)、妖怪的傾向のペークリン(一八二七年)、華麗なる畫風のフォルチュニー(一八三七年生)等の名匠續々輩出し、時代の進むと共に、先人の想ひ到らざりし處に想ひ到り、廣き範圍に於て愈々美に近寄りつゝある。

支那では昔から、瓠巴と稱する樂師が瑟といふ廿五絃の高尙なる琴を弾いたら、水中の魚が浮び出て之に聴き惚れたとか、又、伯牙といふ樂師が同じ瑟を弾いたら、車を曳いて驅けつてた六匹の馬が、歩を停めて首を擡げ、その妙音に聞き惚れて恍惚の間に秣を食つたとかの傳説あり、古代希臘にも又、神代にオルフェウスといふ提琴を弾するに巧な神があつて琴を奏するに、鳥獸山河皆な感動したなぞと傳へられて居るが、音樂の發達したのは後世になつてからのことである。名人ならば、簡單な樂器によつても、妙音を發し得るに相違ないが、樂器が精良になれば、誰でも容易に妙音を之に發せしめて、此の方面より美に近寄り得るわけになる。樂器も初めは、磬を

五年は彫刻
の發達せし
時代なり

希臘の智神
アテナを祀
れるパルテ
ノン堂の彫
刻はフキデ
ヤスの手に
なるフキデ
ヤスの像は
ビタスの像
の如くなる
一見眞の人
の如くなる
ため中紀
に於て七世
算議の七世
算議の七世

(ミロー)の
美神像千
八百二十年
ミロー島に
て發見せら
れし希臘の
美神ウエナ
スの首像に
してルイブ

伏せて踏み鳴らすとか、葦を切つて吹き鳴らすとか、大小の弦を寄せて作つた琴の如き簡單なるものであつたらうが、それに改良を加へられたり又新しいものが作られたりして、金線を二本乃至五本張つた不規則四邊形のツルシメル(Dulcimer)が行はれるやうになり、それが三角形の絃樂器で指又は撥にて彈奏するサルテリー(Psaltery)に進歩し、それが又平たい共鳴箱の上に三十六乃至四十二本の絃を張つたシトール(Citole)に進歩し、更に進んでピヤノ(Pianoforte)の粗末なるものとも觀るべきハーpsiコード(Harpsicord)となり、愈々一千七百七年、伊太利フロレンスの人バルトロメオ・クリストフォリ(一五五生)によつて、今のピヤノが發明せられて以來、樂音を發するこゝが自由になつて、昔の樂師が想ひも寄らなかつた便利な方法で、美に近寄れるやうになつたのである。それから境太利にヘードン(一七三三年生)、獨逸にモツアルト(一七五六年生)、ベエトホーフエン(一七七〇年生)の如き大家が現で、十八世紀が音樂の黃金時代を以て目せらるゝやうになり、次で十九世紀にも獨逸にワグネル(一八一三年生)の如き名家現

ル宮に藏せらるる
ミケランセ
ロは彫刻に
秀でしも亦
建築師畫家
詩人として
著はるる
(ダビデ) 猶
太古代の王
に詩人、智
智者、勇者
を兼ね
(佛蘭西國
立劇場) 千
六百八十年
モリエール
の創設にか
かり現行の
國立劇場の
例は千八百
十二年の發
布にして劇
場は巴里オ
ペラ通り一
王宮中の一
廓にあり

はれ十八世紀に遜色なきを得たのも、一に樂器の進歩せる賜なり云へば謂へる。詩歌に於て、支那には屈原(西紀前四世)が、讒によつて貶せられたるを憤り、西紀前二百十九年、入水自殺するに當つて胸中を披瀝した「離騷」と題せらるる堂々たる叙情詩があり、印度には又古くより、婆羅門文學のうちに「ラマヤナ(Ramayana)」及び「マハバラタ(Mahabharata)」の二大史詩があつて、世界第一の長篇を以て目せられ、又、ホメロスの編せるものなりと傳へられ、世界の傑作を以て稱せらるる「イリヤツド(Iliad)」及び「オヂッセイ(Odyssey)」が、古代の希臘にあつたりした處によつて徴れば、詩歌は随分、昔から發達して居つたものであるが、後世に至つても「神曲」の作者たる伊太利人ダンテ(一三〇六—一三六六)だとか、英のシェークスピア、獨のゲーテ(一七九〇—一八三二)の如き大詩人が現はれ、それらの特長を發揮し、變つた方面から、前代よりも美に近寄つて居る。當今は、ダンテやシェークスピアやゲーテに比敵し得るほど傑出せる大詩人に乏しい時代であるが、恰も當代に科學者の多い如くに、相當の技術

ロダンの作
は彫刻美と
音樂美との
一致點を發
見せんとす
るにあり
「樂人」シヨ
ツパンの如
像一の如き
傑作を以て
目せらるる

(第二節) 美の開拓を要す

(ボムペイ) ヴェスツキ
ウス山麓の
小園に
て周圍約二
哩
(ヴェスツ
キウス火
山) ネーブ

ある詩人の數はウヨ／＼するほど多いから、總體の上より謂へば、詩歌の方面に於ても、今の人は昔の人よりも美に接近したものであると謂へる。總じて大才能のある者は、百年に一人なんか現はれはせぬ。大才能は二三百年或ひは千年にして漸く一人あるか無しかのものだ。歴史あつて以來一萬年、その間には退歩停滯もあらう。又今日の如く、鈍栗の身丈比べの時代もあらうが、全體を通じて謂へば、進歩の跡歴々として顯はれ、人は漸次に廣く且つ深く眞に於けるが如く、美に近寄りつゝあるのだ。

第二節

美の顯はるる範圍は宇宙の廣きが如く廣く、其の顯はるる状態にも、

森羅萬象に差別ある如く種々の階級があつて、日用品より高等の藝術に至るまで、さまざまであるが、又、美を求むる人間の方にも、無意識的、半意識的、全意識的等の別がある。然し、孰れにしても、人は前代より繼承せる處に満足せず、及ばぬながらも、新しい美を多少なりと之に附け加へんとして居る。然らば、何を最も先に美しくするに苦心するか、と云へば、まづ第一に衣食住を美しくせんとし、交際機關を美し

ル市を去る東南十哩の海岸にあり、海抜四千一百六十一呎

(印象派) 大體的印象を繪畫する繪畫の一派にして一千八百七十五年以來は祖とマネを祖とナボムペイ廢墟の壁畫を之に似たりとすは佛國翰林院會員ライイナツハナリ

(象徵主義) 色音等感覺

の緣に於て、抽象的の観念を表現し、超自然的の實在に接觸する主義

孤巴云々の故事は、一荀子に於て、荀子も孤巴と伯牙との誰なるや、詳かならず、周代の樂師ならん

(オルフェウス) 陽氣の神アポロンの子

(提琴、箏、篋) に似て小なるもの

樂器の最も古きものは

くせんとする傾向がある。男女共に流行を追ふに汲々たるのは、周囲の事情に順應せんとする爲めであるに相違ないが、畢竟するに、前に美とせられてある處に満足せず、一層の美を期へんことを欲するより起ることだ。時には厭ふべき流行があつて、前よりも醜陋となることがないが、これは、生物進化の間に見らるゝ退化のやうなもので、一時の變調たるに過ぎぬ。全體の大勢から謂へば、人は各其意識し得る限りに於て、全力を盡し、時代の進むと共に愈美を進めんとするを心懸け、容易に人目に觸れざる羽織の裏だとか、長襦袢だとかいふものまでをも、美しくするに努むるのである。

藝術は、誰にでも能きるといふものではない。試みても能きぬ者がある。又大抵の人は、慰み半分に之に指を染めて試ても、妙を究むるまでに努力する熱心の無いものだ。然し、藝術家の作つたものを玩賞して美を求めんとする傾向は、時代の進むと共に増進して來て居る。文部省美術展覽會が年々繁昌を増すのに徴しても、之は明かだ。殊

に、近年に至り寫眞と製版との術が進歩して名畫を廣く玩賞し得る機會を作つたので、人の繪畫に對する趣味も、之に刺戟せられて昂進し、又、同時に樂譜が巧に作られ、良い樂器も多く廉價で製造せらるゝやうになり、更に又蓄音器が進歩したので、人は音樂によつても美に近寄るに一層の便利が得られる様になつて居る。詩歌も亦、印刷術の進歩によつて廉價に出版せられ、日本の田舎に於て猶ほホメロスやゲーテの詩集を、僅かに五十錢を投ずれば繙けるまでになつたので、此の方面からも、多數の人が美に近寄りつゝある。又、金銀寶石の如き美しい天産物が、年々増加して來るのも、人に美を求むるの念あるが爲めだ。美を鑑識する力の乏しい者は、高價な藝術品でさへあれば、珍重する如き馬鹿な真似もやるが、之れこそ、人に美を愉快に感ずる感能があるの致すところとして恕すべきである。然し、苟くも、其身藝術家を以て任じ、美を求むる事を專業とする者は、前人の近寄り得た以上に、更に廣く更に深く美に近寄り、之を得て後代に遺すやうに心懸けねばならぬのだ。近代の世の中には、美を求

鼓にして盥
を伏せて履
み鳴らす
如きは鼓の
最も古き形
式なり現に
次ぎ笛現れ
最後に絃樂
器の現れを
見るに至れ
る如し

(ツルシメ
ル)匈牙利、
波斯、亞刺
比亞等に行
はれたり
(樂音)發音
體的振動週
期的にして
愉快なる感
覺を興ふる
もの

めて之を發揮するに足る材料も豊富なること故、新しい美を前代の美に附け加へて後代に遺す事は、必ずしも難く無い。人にして、前代人と同一なる能力を有する限り、前代よりも優つた美を後世に遺し得る筈では無い。美にも眞と等しく増進的の連續がある。然るに猶ほ之を追ふて美を増進し得ずとする人あらば、其人や病者に非ずんば痴者である。

(此章註補遺) ナイト以爲く十九世紀の代表藝術は日耳曼音樂なりと▲屈原(周末の楚人にして泪羅に投じて死す▲ラマヤナ、マハバラタ)共に王子の名にして其武勇譚を詩に續れるもの▲(史詩)物語の詩▲(イリヤツド、オヂツセー)國王の武勇譚▲(神曲)地獄、煉獄、天國の光景を歌へる大篇▲ナイト以爲く藝術の玩賞者は又是れ藝術家なりと▲現行の西洋樂譜は千二百年頃獨逸ケルンのフランシスが發明せるものなりと傳へらる▲名古屋鈴木工場にて製造のヴァキオリンは一挺七圓内外にて發賣せられピアノにも一臺百五十圓のものあり▲落音器の最も粗造なるものは一八五七年英人スコットにより發明せられ其後一八八五年より一八八八年の間に於て米人エヂソン及びベル等之を改良し今日の如きものとなせり▲寫眞乾板の使用は千八百五十四年佛人ゴードンにより發明せられ寫眞製版術は十九世紀末に著しく發達し之を現今の綱目とせしは獨人マイセンパツハの力なりと信ぜらる▲活版印刷は十五世紀の中葉獨逸に端を發して行はれ昨今は坐して活字を組み得るモノタイプの法行はるゝに至れり

(第十章)連
續の一部
(下)

(第二百一
節)下等動
物の道徳
第百十九節
參照

獨人パウル
セン以爲く
職分の遂行
は善となる
と

第十章 道 徳

第二百一節 下等動物とても、眞を離れ、美より遠ざかつては、食を得ることも能き無ければ巢を造ることも能き無くなる。斯く々々の事情の場所には斯く斯くの食物があるものだ、との眞を得て初めて餌にありつけるわけのものだ。巢を造るにも美しい形式に出來上る均整を無視しては、決して巢を造り得られぬことになる。恰度、それと同じやうに、善を求むる傾向は、下等動物にもある。善を求むるは、自己の生活を圓滿にし、周囲の安寧を増進するに力むる事だ。之が道徳と名づけられるのであるが、道徳は、人間に於て先づ家族の間にあつて家長の命令に服従するに始まり、大なる社會を形成するに及んで、一層重要な意義を有することになるものだ。下等動物と雖も、種屬保存の必要上より、多少の共同生活を營み、小さいながらも社會を形成するに當つては、其間に道徳があり、各自の職分を重んずることになつて居るもの

へるや否や
明かならず
五常を仁義
禮智信とす
るに至れる
は宋儒なり
(法句經)佛
教の要義を
簡明に説け
るものにし
て印度の僧
法救の編せ
るもの

マホメツト
の如く其初
め熱帯地方
に弘演せら
れし宗教が
不飲酒戒を
説くは飲酒
は熱帯にて
殊に健康を
害するもの
ありとの説
あり

生に、義は不偷盜に、禮は不邪淫に、智及び信は不妄語及び不飲酒に顯れて居る。不飲酒は、之を文字通りに解釋すれば範圍が餘り狭くなるが、飲酒をすれば、智を亂し信を缺くに到るから、之を禁じたものである。伯伯來人の信奉せし猶太教の經典舊約聖書「出埃及記」にあるモーゼ(西紀前一五七一年生)がシナイ山にて、神より授かりしと傳へらるる十戒たる

- (一) 汝、我が顔前に我の外何物をも神とすべからず
- (二) 汝、自己の爲に何の偶像をも彫むべからず
- (三) 汝の神エホバの名を妄りに口にあらざ
- (四) 安息日を憶えて之を聖潔すべし六日の間勞きて汝の一切の業を爲すべし
- (五) 汝の父母を敬へ
- (六) 汝、殺す勿れ
- (七) 汝、姦淫する勿れ
- (八) 汝、盜む勿れ
- (九) 汝、その隣人に對して虚妄の證據をたつる勿れ
- (十) 汝、その隣人の妻及び其の僕、婢、牛、驢馬並に凡て汝の隣人の所有を食する勿れ

(シナイ山)
近蘇七海の附

(希伯來)地
中海の東に
當れる西北
五十哩南北
百五十哩の
小國にして
西紀前一三
二〇年より
同九七五年
頃まで最も
繁榮しキリ
ストは同國
に生る
(モーゼ)希
伯來の宗教
的政治家
獨人ホブ
は春推類動
物に仁義禮
智信あるを
説けり

も神に關する部分だけを除外せば、支那及び印度の五常、五戒と略々同じである。此くの如き事は、或る程度迄ならば人類以下の動物の間にも行はれて居るもので、原人の間にも此の種の道徳は行はれたことが、窺ひ得られる。古來、此種の道徳の行はれなかつた種屬は皆永續して居らぬ。韓人の衰滅しかけて居るのも實に之が爲めだ。之によつて之を觀れば、善に近寄るとは、大抵何んな事であるか、道徳とは如何なるものであるか、こいふことも、略々知れる。然し、道徳の行はれるに就ては、眞や美に於けると等しく、無意識的になると、半意識的になると、全意識的なるこの別があつて、人類社會の複雑になると共に、漸次意識的に進み、道徳を守らざるべからざるを説いて、社會の安固を謀るやうになるものだ。随つて、五常とか五戒とかいふ如き漠とした大綱を擧げて、道徳の規準を示すのみを以て満足せず、更に細目を擧げ、仁、義、禮、智、信の内容に亘つて一々分析を加へ、殺人に就ても實際に手を下した者のみならず、之に間接ながら關係した者をも咎め、邪淫に於ても有夫の女との間の姦通のみならず、

基督曰く、女を起す者情を起す者、其心既に姦淫したるなりと

これに類似せる行たる女買ひなどをすら咎め、妄語に於ても、單に他人を欺瞞する者のみを責めず自らの力を揣らず、誇大に力量を吹聴し法螺を吹いて、快とする如き者をも咎め、飲酒に於ても、單に飲酒のみならず、煙草を喫ふ者をすら咎むるまでになつて、漸次、時代の進むと共に、人の行爲に對する判断は緻密となり、人間は一步でも進んで、廣く深く善に近寄らうとしつゝあるのだ。

第二百三節

社會の要素は、總て同時に進歩するもので無い。政治、軍事、商工業、科學、藝術等の進歩するのに必ず比例して、道德的行爲も亦進歩するものとは限らぬ。然し大體の上から謂へば、何れも皆相聯繫して居るもの故、其中の一つが進めば、自然と他のものも進まねばならぬ事になる筈だ。一言にして掩へば、隆盛に向かふ國は、萬事に於て進歩すると共に道德も進み、衰退する國は萬事に於て退歩すると共に道德も退くもので、道德進みて國益々富强、國富强にして道德益々進み、社會の進歩と道德の進歩とは、互に因となり又縁となるものである。隨て、既に今日まで

(煙草) 千九百五十九年、米大陸より西に漸次、歐洲に及ぶ。歐洲の流行は、十七世紀の初めより、世に紀の初と期

せらへし、日本への、輸入は、西暦一千六百五十年

の社會に、進歩が、あつたものとすれば、道德も亦進歩して來た、筈である。世間では能く、近時青年の、墮落を云爲するが、今日の青年道德は、遂に二三十年前の青年道德より進歩して居る。現に、酒色に溺れる學生全體の數が増加せし割合に、二三十年前よりも減じて居る。當今の日本は、賄賂横行の時代だ、といふものもあるが、「お役徳」と稱して賄賂を公受した舊幕時代に比すれば、當今は之を隠すだけでも、道德が進んで居る、と謂へる。或は又、近代には、昔にあつたやうな有名な道德家が現はれぬからして、道德が時代の進むと共に却つて退いたかの如くに云ふ論者もあるが、有名な道德家の現はれる事は、必ずしも其時代の道德の進んで居るのを、證するもので無い。或は、その時代の道德が衰へて居つたので、民心をして善に近寄らしむる必要上、稀代の道德家を出すに至つたものであるとも謂へる。加之、善の才たる大道徳家も眞及び美に於ける大才たる大科學者、大藝術家と等しく、一二百年或は一二千年にして漸く一人を出すに過ぎぬもので、必ずしも其時代に於ける道德程度

菅原道真、
如きは這れ

を代表する者では無い。又、實際それほどの秀でた道徳家で無くつても、周囲の事情に引き立てられて、後世から大道徳家らしく見えてる人物もある。されば、假令、後世に於て、昔ほどの大道徳家が現はれぬにしても、今日になるまでに、社會が進歩して來たものとすれば、道徳も亦等しく進歩して、人間は昔よりも、廣く且つ深く善に近寄るやうになつたものと観て、差支ないのである。少くとも、道徳にも亦、進歩があるべき筈のものだ、と謂ひ得るのである。

(無爲) 權謀
術数を用ひ
ず仁徳を體
する事
(重婚) 同時
に一人以上
の妻若くは
夫を持つ事

傑出せる道徳家云へば、まづ第一に孔子などが擧げられるが、孔子の如き大道徳家も、時代の囚れよりは全く脱し切れなかつたもので、今日の時代道徳の立場から觀れば非難すべき點が、幾らでもある。孔子は、舜(西紀前一九〇〇年頃)を賞め、「論語衛靈公篇」に於ても「無爲にして治まるものは其れ舜なるか」と曰ふてるほごだが、かく孔子に賞められた盛徳の舜は、堯(西紀前一九〇〇年頃)の娘二人即ち娥皇と女英とを妻にして居る。姉妹二人と重婚する如きは、今日では殆ど畜生のする所行と見做され、重婚は帝

帝國民法第六
條に曰く六
配偶者あ
るものは重
ねて婚姻を
爲すことを
得ず」と
(親等) 二人
の血族間の
隔り即ち世
代にして此
の世數を計
算し何親等
といふ
「同姓不娶」
は周の「典
禮」に明記
せらるゝ處
にして「同
姓」は血族
の意なり第
七國民法第
七條に曰く
直系血族
又は三親等

國民法に於ても禁ぜらるゝ處なるのみならず、五親等内の血族關係ある女との重婚は、般(自西紀前一四〇〇年)の時代に於てさへ許されず、周(自西紀前七九二年)の時代に至れば、血族關係ある女等との重婚は全く禁ぜられてあるほごゆゑ、姉妹と重婚した舜を賞めた孔子の行爲は、今日の道徳標準から觀れば、不道徳者を賞めたことになり、五常の一なる義に悖るものといふべしだ。又、孔子は「論語陽貨篇」に於て「女子と小人とは養ひ難しと爲す、之を近づぐれば則ち不遜、之を遠ざくれば則ち怨む」といふて居るが、女子の腦力は男子に比し劣等ゆゑ、女子と小人とを並べて云へば云へる點があるにしても、今日の如く社交が發達して、社會に於ける快樂の増進を謀るため、女子の力を藉らねばならぬ時代になつて觀れば、女子を小人と並べ稱するのは、五常の一なる禮に悖ることで、不道徳だといふわけになる。又、孔子は「論語述而篇」に於て甚だしい哉、吾が衰へたるや。久しい哉、吾れ復た夢に周公(西紀前十一世紀頃の人)を見ざるこ

とや」と曰ふて居るが、人は想はぬことを、存外多く夢に見るもので、平生思ふて居

(東修)乾肉を十挺束ねたるものにて最も簡単なる入學金

英人グレハ「哀歌」のうち之を歌へり

(新約聖書)西紀二世紀頃に編纂せ

の三代を道徳上の黄金時代であつたかの如くに心得、三代に於て人間は善に最も近寄つて居つたやうに想ふのも無理はないが、社會の進歩の目醒ましい土地に於ては、矢張り、善に對しても、後代は前代より進んで居るものだ。孔子は「論語述而篇」に於て「東修を行ふより以上、吾未だ嘗て誇ふるこゝ無くんばあらず」といふてゐるほどで、些少でも入學金を持参して來るほどの志しある者に非ざる限り、猫に小判を與へるやうなものだからとて、道を説いて教へなかつたものらしいが、ソクラテスは入學金を持参して來る弟子を待つてゐるやうなことをしないで、自ら進んで街頭に立ち、道を説いたものだ。金錢の點に於て、孔子の徳はソクラテスに劣るものだ、と譏られても致し方があるまい。又、後世の人や無名の人で、前代の人や有名な人に優つてゐる人物が無いことも限らぬ。ソクラテス以上の人物も、或ひは其間にあらう。基督は、名聲の世に轟いてゐる割合に、その實際の事蹟の詳ならぬ人であるが、基督の死後基督教に改宗して基督の教義を祖述したパウロ(六七年歿)は、或ひは基督よりも優つてると謂へ

(基督の模倣)基督の修養法を説ける書にて神味を帯ぶ

ば謂へぬでもない。基督教の經典たる新約聖書の大部分は、パウロの書簡で、今日の基督教は、基督の基督教といふよりも寧ろ、パウロ教たるの觀があるではないか。聖書に次で、基督教徒の間に重んぜらるゝものに「基督の模倣」なる一書がある。これは、獨逸の聖僧トーマス・ア・ケムピス(一三八〇年生)或は佛國の聖僧ジャン・ド・ゲルソン(一三六三年生)の作だと傳へられ、作者が未だに判然せず十中八九は、トーマス・ア・ケムピスの作らしいが、兩人ともに有徳者で、能く基督を模倣し得たる人々だ。是以外にも、後世に於て基督と同等若くは以上の大徳者が無いとも限らぬ。後世の羅馬帝王のうちにも學術、工藝、文學、産業を奨勵し、國民道徳の改進に鋭意したハドリアヌス(一一七)や、素行が嚴格で哲學的頭腦を有したアントニウス(一六一)の如く、堯舜を凌ぐに足るべき有徳者がある。

(第二百四節)道徳の發達を要す

第二百四節

社會の進歩の確實な處には、必ず道徳的行爲の人を發見し得るものだ。英國にも素より惡風がある。然し、同國は確實に進歩して行く國柄である文に、

生獨身は終
しが金に終
淡泊に悦び
華奢を悦び
にため一人
十に付一人
肉を消費の
し割合なり

(サルヂニ
ア)の南に
ある地中海
の島

動もすれば善より遠ざかりたがる傾向を有する政治家の間ならず、他國に見る能はざるほど多くの道徳家を出して居る。十八世紀の中葉以後に於て、英國の勢力を歐洲全土に高からしむるに力あつた宰相ウヰリヤム・ピット(一七〇)の如きも、その酒を嗜み華奢を悦び、金錢を湯水の如くに使つた點を除けば、純潔なる簡易生活を送つた大徳の人である。グラツドストーン(一八〇)は、稍頑迷なところがあつたりなぞして、種々非難すべき點も無いでは無いが、之れにて大體に於て有徳の人である。又、千九百五年より千九百八年までの宰相であつたカムベル・パンナーマン(一八三)の如きも、又、有徳の人であつたを謂へる。伊太利は千八百十九年以來分裂して衰運に陥り、國民の間にも淫風盛みなり、勤勉力行の風を缺くに至つて居つたが、ウヰクトル・イムマヌエル(一八二)がサルヂニア國王の位に即き、千八百五十三年カブール(一八一)を其宰相に擧げ、同五十五年英佛と露西亞との間に行はれたクリミア戦争に關係したり、千八百五十九年に及び、佛、埃兩國に宣戦したりして至半島統一の氣運を促し、國運の興

せしより起
リクリミヤ
半島に戦は
る宣戦は一
八五四年

隆を見んごするに至るや、カブールの外にもガリバルヂー(一八〇)の如き大人物が現はれて居る。兩人共に高潔の有徳者である。北米合衆國の如き、國運の駸々として興隆する國には、第一次大統領のワシントン(一七三)とか、第十六次大統領のリンコン(一八〇)とか、コンコードの聖人と稱ばれたエマーソン(一八〇)其他の有徳家を出して居る。米國には拜金宗の如き悪風も流行するが、なほ國運の傾かぬのは、全く斯くの如き有徳者が、國民の間に少からぬからのことだ。日本にだからとて、又、稱するに足るべき有徳者が、近年に於て無いわけでも無い。家如何に貧しくも晏如として毀譽褒貶を意とせず、學に志し徳を修めた伊藤仁齋(西紀一七〇五年)近江聖人と稱ばれた中江藤樹(慶安元年)の如き昔にあつた有徳者が無い迄も、西郷隆盛や乃木希典(西紀一八一四年)などは、有徳者のうちであると謂へるほどで、國民多數の上から謂へば、益々興隆に向かひつゝある日本國の道徳は、時代の進むと共に進歩して居る。之れに反し、衰運に傾き社會の退歩しかけて居る國には、假令ば、賄賂横行、貴族

僧侶の横暴甚だしく賭博盛に行はるゝ西班牙の如く、其間に少數の有徳者があつたにしても、多數國民の道徳は、衰へて行くばかりのものである。社會の盛衰は必ずしも、其富と兵力とによつて卜すべきものでないが、各方面に於て進歩の徵明かなる社會に於ては、道徳も亦必ず進歩して居るもので、後代は前代よりも漸次に、廣く且つ深く善に近寄つて居るものである。地球上にある社會全體を大觀すれば、假し其中に退歩して進まぬ社會があつたにしろ、人類としては進歩して居る。随て又、人類全體の道徳も日に月に進歩の途にあつて、人は漸次に善に近寄りつゝあるものだと謂はねばならぬ。人は、前代により傳はつた眞美とに、新しい眞と美とを附け加へて、之を後代に遺さねばならぬやうに、前代より善事として傳へられたものゝみに満足せず之に新しい善を附け加へ、前代よりも進歩した道徳を後代に傳へねばならぬものである。善にも増進的連續がある。普通の能力を有しながら、此連續を追ふてゆかぬものは、正しく常態を逸した人非人である。

(第十一章) 連續の追隨

第十一章 眞美善

(第二百五節) 連續の限定不限定

第二百五節

何事でも、一切世間皆無限の連續の一部であるが、その一部のうちで豫め到達點の定まつて居るものと定まつて居らぬものがある。植物の發芽、成長、繁殖するのは、地質や氣候などによつて等差を生ずるにしても、その發育繁茂に一定の程度がある。或る程度まで連續を追ふてゆけば、その上如何とも能き無くなつてしまふものだ。蟻、蜂の如きは、社會を組織し、其社會に大小の別をも生ずるが、或る一定の状態以上に、進歩し得られぬ。鳥獸とても、其數に増減はあるが、年々略同じ事を繰返し、千年万年経つたまで、格別の變遷が無いらしい。但し、地球の事情が大變動があつて、鳥獸の形態が之に適應するため、大に變化するやうにでもならばその生活状態も大に進むかも知れぬが、目下のところでは、兎に角、植物、動物共に連續を追ふ程度に制限がある。獨り人類にばかりは、植物や他の動物と其趣を異に

向かつて試ても是れで終局だ、といふ到達點に達する事が能きず、仲には、マゴクウロ／＼して居るものが無いでも無い。然し、總體の上から觀れば多少なりとも進んで、人が常に前代よりも一層、眞、美、善、善に近寄りつゝある丈は事實だ。その進みつゝある距離は、或は頗る短いものだかも知れぬが、萬年數萬年を経過するうちには、その短い距離も積り積つて、長い大きなものになる。無限の連續を追ふてゐるうちには、或る時代に於て、是處が眞、美、善だ、と思ひ込んでゐる處を、新しい發見やら製作やら行動やらに攪亂されて、頓と見當がつかなくなつてしまふやうな事もあれば、又、自ら眞、美、善だ、と思ふてゐる處を、他の人に否定されたりなぞして、惑ふ事もあるに相違なく、何を眞、美、善として可いのか誰でも疑を生ぜざるを得ぬ。ここに於てか、自分が眞、美、善なりと意識する處を、眞、美、善なりとするのが一番面倒が無くつて無難だ、といふ論者もあるが、自分が意識せずして、眞、美、善を得て居る如き場合が、又無いでも無い。否、之は眞、美、善の反對なる偽、醜、惡である、と

認めた處に、却つて眞、美、善となすべきものが在る事さへあるものだ。眞、美、善の標準を決するに就て、斯く自分の意識は信賴するに足らぬものだ、としたら、自分の意識を全く棄てて、他人の意識にのみ依るべきものだらうか。これとても、自分獨りが覺り得て、他人の意識し得ざる事も多い者のゆゑ、全然信賴するわけにゆかぬ。自分の意識も他人の意識も眞、美、善を決する標準にならぬ者としたら其標準は果して何處にあるのだらう。曰く、或る群衆の中にある、即ち、眞、美、善の標準は、民族の如き小群衆、或は列國人士の如き大群衆の間にあるのだ。然し、それだからとて、常に一定して居るものではない。之を明瞭にするのは却々困難で、不明瞭の間に多數の人々によつて認識せらるゝまでの事である。

眞、美、善の標準の不明瞭なる事は、世界中の人々をして悉く、眞、美、善の何んであるかに就て、一致せしむる能はざるに依つても明かだが、所謂衆愚は之を除外するとしても、少數なる識者の間に於てすら、之に就ては異見紛々故、識者の意識に

第二百八節 參照

とても、信賴して之により眞、美、善の標準を決するわけにゆかぬものだ。斯う考へて試ると、眞、美、善の標準は、あつても無いやうになつてしまふが、比較的多數の人間即ち群衆の擇んだ眞、美、善の標準を標準として、眞、美、善を求め、無限の連續を追ふてゆくものは古往今來概ね皆な繁榮し、然らざるものは、衰微する事實があるのによつて徴れば、比較的多數の群衆の擇ぶ眞、美、善の標準が是れ、その時代に於ける人々の、依つて以て信賴するに足る眞、美、善の標準なりと見做して差支なく隨て、繁榮する群衆の擇む眞、美、善の標準が、比較的信賴するに足る標準であると謂へる。されば、所謂文明とは、繁榮する群衆の擇む眞、美、善の標準によつて、眞、美、善を求め、無限の連續を追ふ事に外ならぬ。然し、宇宙の連續は極めて複雑錯綜して居るものゆゑ、一方面の連續に於て進んで居つても、他の方面の連續に於て進んで居らぬ場合がある。故に、一部分をのみ觀て、漫りに或る國家或は民族の盛衰を卜すべきでは無いが、連續の大部分に於て、進んでるものならば、之を繁榮する群衆と

見做し、その擇む眞、美、善の標準を、まづ以て萬人の信賴するに足る標準と見做して可なりだ。繁榮せざる群衆が、假令、之に反抗してその標準の承認を拒んでも、周圍の事情は之を承認すべく餘儀なきに至らしむるものである。人が、所謂文明の糟を啜つて世渡りをせねばならぬ所以、實に茲に在る。

眞、美、善は必ずしも常に平行して進むものでない。随つて、繁榮する群衆でも、その社會の要素が總て同一速度で進んで居るものには限らぬ。然し、繁榮するものと認められ得る群衆の爲す所は、必ず他の群衆に影響し、その擇む眞、美、善の標準の如きも亦、必ず廣く他によつて則らるゝやうになるものだ。それにしても、多數の群衆又は勢力家が暴威を逞ふし、假令ば、當時の社會がガリレオの地動説に對せる如く深く研究して發見した眞を窮迫して顯はさぬやうにしたり、或は、露西亞がトルストイ(一八二〇年)の「クロイツエル・ソナタ」(Kreutzer Sonata)に對せる如く、苦心慘憺の餘になつた美的傑作を醜作なりと見做して埋没したり、或は同胞の爲に盡瘁して至らざるな

(ク)ロイツ
エル・ソナ
タ(一八二〇
年)の男上梓
に於て心理
關係の心を
痛寫せるが
を實なるが
發願するを
禁止せらる

き善行を、フロレンスの國がダンテを追放し其財産を没収してしまつたやうに、罪惡なりとして排斥する事が無いでもない。然し、斯んな事を永く續ける群衆は決して繁榮せぬものだ。若し繁榮を續くるにすれば曩に多數若くは勢力家の爲に壓伏せられてしまつた眞、美、善の價値が、認めらるゝやうになつて來るものである。連續は單純のもので無いから、これを追ふてゐるうちには、岐路に迷ひ込むことがあつたり、又、一たび定められた標準の、誤れることが忽ちにして發見せらるゝやうな事もあつたりするだらうが、人類全體の進歩が確實のものであるとすれば、眞、美、善の何たるかの如きも、時代の進むと共に漸次、明白になつて來るべき筈のものである。然し、究極の眞、美、善に達するのは、望んでも得べからざる事で、併も之が人間をして活動せしむる所因になる。徒に早く究極に達せんことをのみ望み、それ以上進まずとも濟むやうにしたい、なぞこの根性に、人間もなつてしまへば、それこそ、世の中は既う末世で無限より無限に至る無限の連續と、強いて絶縁するわけになる。人は須らく

(第二百七節)時代の先後得失

各々その天品を盡くして其の時代に於て進み得る限りを進み、以て無限の連續を追ひ、全力を傾けて求め得る丈の眞、美、善を得て甘んずべきである。

第二百七節

若し人類は年代と共に進歩するもので、前代に眞である美である善であるにせられたことの、誤謬であるのを、後代に至つて發見訂正し、時代の進むと共に、人類は益々廣く愈よ深く眞、美、善に近寄つて來るものだ、とすれば、人間は早い時世に生れるほどつまらなく、晚い時世に生れるほど仕合せのやうにも想へるが、人は決して斯く考へてはならぬものだ。人間は、何れの時代に於ても、限りある人力を以てして無限の連續を追ひつゝあるものゆゑ、數十年前生れ出でても、數千年後に生れ出でても、進み得る限りを進み得るに過ぎぬから、満足する心地に於ても不満足なる心地に於ても、數千年前と數千年後との間に逕庭のあらう筈が無い。又、前の時代に於て、既に或る程度まで進歩して居らぬと、後の時代に於て、如何に進歩しやうとしても進歩し得ぬものだ。時に、前代に何か劣れるところがあつて、退歩或は停滯

漢の高祖の即位に即くや其禮多くは之を秦に取れり

(第二百八節) 眞實の繁榮

したにしても、多少なりとも、後代に便益を遺すものだとするれば、前代は後代の爲に必要缺くべからざるものである。亞米利加や阿弗利加や太平洋洲にある土人の社會は、進歩せる社會の人より觀れば、前代は毫も後代に裨益を與へず、千年萬年同一狀態にあるかの如くにも思はれやうが、それでも猶ほ多少の新しい眞、美、善を後代に傳へて居るものだ。況んや、支那に於ける周の文明は、後代たる、秦の文明より劣つて居ると計りは謂へず、漢や唐の文明は必ずしも、その後代たる宋、明の文明に劣るとは謂へず、何れも前代は後代の進歩に貢献せるに於てをやだ。歐洲の中世紀は、暗黒時代の稱があるほぎで、文明は一見退歩せる如くにも思へるが、實は然らず、希臘羅馬の文明と近世文明とを接續さする爲めの、坵壘の如き作用を營みつゝあつた時代で、近世の進歩に貢献する處が、却々に多いのである。随つて、人生の價値は、人の生れ出でた時代の前後によつて決せらるべきもので無い。

第二百八節

眞、美、善は、必ずしも平行して進むもので無い。獨り知識のみの

(國家)一定の土地に於て政治組織を有する人類の社會

進むこともあれば、藝術のみ進むこともあり、又道德のみの進む事もある。然し、眞實の繁榮とは、眞、美、善が平行して進む狀態にあることで、繁榮する群衆は、知識藝術、道德のうち既に進めるものあれば、益々之を進めんとし、進まざるものあれば、之を特に大に進めて、三者の足並を揃へんとするものだ。價値のある國家とは、かゝる態度の群衆によつて結成せらるゝ國家のことで、繁榮する國家は、假令、幾多の缺點があるにしても、同時代の他の國家に比し、知識、藝術、道德の三つ或は二つに於て、決して他に劣る處のないものだ。兵力、財力をさへ充實した富強の國家になれば、必ず繁榮するものと云ふに、爾うでない。兵力、財力は眞、美、善を増進する手段として効力あり、眞、美、善が増進すれば、國家も繁榮するわけになるが、眞、美、善を度外視しては、如何に兵力、財力が充實しても、其國家は決して繁榮せぬ。蒙古より成吉思汗鐵木眞(西紀一五〇五年生)起り、その子孫が遂に支那を一統して、元(自西紀一六七〇年)朝を建てたのは、決して兵力にばかりよつたものでない。眞を求めて歐洲と

て毫も恥る處が無いからだ。ハックスレーは、生存競争の残存者で、往往道德上最劣等の者もあるといふてるが、如何にも其の如く、個人に就て觀ても、有徳者必ずしも榮えず却つて禍を被ることなきにしも非ずだ。然し、これは少數の例外で、多數の上から大觀すれば、其人の道德如何は、直に其人の盛衰に影響するものである。また、榮える人のうちには、善を離れて居る如くに見えて、其實は善に近寄つてる人も、決して少くない。人の榮えるのは、概ね其人の求め得た善によつて榮えるものであるのに、世間には之を誤解して、其人が悪によつて榮えて居るかの如くに思ひ違ひする者も尠くない。英人レッキー（一八七）も曰ふてるやうに、悪政、悪法は一時、或る個人若くは或る階級に利益を與ふることがあるにしても、その國家は決して繁榮するものでなく、多人數に善を求むる慾望の旺なる國家が、最後の勝利を占むるものだ。道義が頽廢して猶ほ、能く四隣を壓する國家があつても、それは一時のことだ。若し、それが永續するものとなれば、其國家の道義頽廢は一部分で、他の部分が健全で善を

求めつゝある賜たるに外ならぬ。列國の競争は、今や激烈にして、時に甚だ残忍なる所行があつたり、眞、美、善を眼中に置かぬかの如くに見えもするが、人類を總括して大觀すれば、假令、少しづゝなりとも、日に月に眞、美、善に向かつて近寄りつゝある事を、疑ふわけにはゆかぬ。

(第十二章) 幾分の満足

第十二章 現在の宇宙観

(第九百九十二節) 能知の絶對的不可

第九百九十二節

人は皆な、絶えず連續を追ひつゝある間に於て、何の方角に向かひて試ても、其連續の無限なるに驚いて居るのだが、或る程度に止まつてしまつて、それ以上進んで無限の連續を追ふてゆけぬ者は、力の足らぬ者か、否らずんば、周圍の事情に妨げられて居る者である。かく、宇宙の連續は無限のものであるとすれば、絶對的の知識即ち、この上進みやうのないといふ如き知識は、如何に望んでも得べからざるわけだが、知識慾の熾なる人は、能ざる丈け絶對的の知識を得んとするに努め、疑問を未解決のままに、放つて置くやうなことをせぬものだ。然し、絶對的の知識は今日に至るも依然として得られず、就中、主観客観の關係の如き、頗る明瞭を缺いて居る。即ち、認識する者が無ければ、物象の有無を知り得べきでないから、世の中は萬事が主観で、主観あつての世の中であると考へる者も、認識する者の數には限りな

く、幾人もあるが、認識せらるゝ物象は一つで之に對する認識の内容は、其人々々によつて異なることになるから、物象あつての物象で、主観あつての世の中ではムらぬ、客観的に考へる者もがある。その結果、一元論ともなり、二元論ともなり、唯心説ともなり唯物説ともなつたのだが、主観あつての世の中か、將た客観あつての世の中か、未だに確定せぬ。種々の研究も、畢竟するに、之に關する知識を稍々精密にしたといふ丈けの事で、偶々解決せられたる如くに思ふて試ても、少し深く考へると、また忽ち不明瞭になり、満足を得られぬやうになつてしまふものだ。

認識論の旺に研究せらるゝ所以は、認識の根柢をさへ明かにして置けば、此基礎の上但凡らゆるものを、安全に積み建てゝゆけるやうに思ふからのことで、畢竟、人間に知識慾が熾なるの致す所である。知識慾の弱い者は、認識論に於ても、或る程度までの解決を爲し得れば、それで満足し得られるか知れぬが、知識慾の強い者になると、容易に満足せず、攻究の歩を進むるに隨つて問題の範圍が愈々益々廣くなり、容易に

満足し得られぬわけのものだ。デカートの如く「我は考ふ、故に我は在り」にして、この基礎の上に一切を築きあげ得るものとする如きは、デカートの時代の如く、自我以外を悉く疑ひ得た時代に於てのみ考へ得ること、今日の如く、知識の進歩によつて、事理明白となり、自我以外にも、疑ひ得ざるものゝ多くなつた時代に於てまでも猶ほ斯く、万象に疑を、挿んで考へるのは、一種の好事的遊戯であると見做さねばならぬ。須らく事實を事實として攻究すべきだ。然し今日でも之に疑を挿む餘地が無いといふのでは無い。認識する者が無ければ、宇宙の如何なるかは素より知るを得ぬが又同時に認識する者によつて認識せられて居る宇宙は、全然幻影である、この疑を起し得られぬでもない。認識する者によつて認識せられて居る宇宙が、幻影で無いとの反證を擧げるのは、却々に困難の事である。

(第二十節)
進歩 科學の

第二十節

今日の科學に於て、疑ふべき餘地無しとせらるゝ事も、將來に於て或は疑はるゝやうになるかも知れぬが、將來に於て起る疑は、一步進んだ疑で、

今日信すべしとする處に近寄らんが爲めのものに外ならぬ。されば、今日の科學の成果のうちには、疑はしきものもあるが、餘り疑へぬものも尠く無いから、科學を全く棄てゝしまふわけにゆくものではない。既に棄つる能はずとせば、科學によつて闡明せられた雑多の現象及び理法をも、承認せざるを得ざることになる。意識に於て主要の位置を占むるものは、心の働きたる自我であるか、或は又、外界の物象であるか、其間に於ける主客關係が、假令、明白ならざるにせよ、冥想により、自我のみを主にして宇宙を知らんとする如き手品は、當今漸く行はれぬやうになつて來て居る。隨つて、五官に觸れたものは、その人の腦神經が病的に成り居らざる限り、或る程度まで確實なりとせざるを得ないわけになる。今日まで進歩せる諸科學を、今後も益々進歩せしめんとせば、斯く考へて然るべき筈のものだ。然し、今日でも、科學の進んで居らぬ土地たる印度に於ける或る人々の如く、科學を以て信するに足らざるものなりとし、宇宙は我が一身あつての宇宙で、我が一身と共に宇宙は顯滅すべきものである、と信

する者が無いでも無い。されど、苟くも幾許か科學の確實なる認むる者の間には、意識に於て斯く自我をのみ主にして考へるやうなことの無いやうになつて居る。

如何に進歩せる科學でも、決して絶対の知識を得て居る、と主張するのでは無い。その時代に於て達し得る限りの點に、達して居るといふ丈けのことである。何れの時代にあつても、科學の任務とする處は、過去の進歩と將來の進歩との間に連鎖を形作り、前代よりも知識を正確にし、後代の知識を更に一層正確ならしめん事を期するにある。絶対の知識には、到底、到達し得らるゝもので無い。然し、獨人ラインポルド(一七五八年生)の如く、絶対を意識のうちに存するものとし、之に達し得られぬ筈が無い、と論ずる學者もある。なるほゞ、それに相違ないとしても、絶対が意識に存するのは達すべからざるものとして存するので、達し得るものならば、絶対では無い。隨つて世間に於て、これが絶対だ、と聲高く稱ばるゝものがあつたにしても、それは一時の假定的絶対で、後代に於ける科學の進歩は、之を絶対で莫くしてしまふことが、往往

ラインポルド最高原理は、各人が總ては證明を要せず、直接に認めて得べき事實に於て、實に其識事、人の意識と事、實なりと

にある。絶対研究を殆ど専門にして居る彼の形而上學に於て到達せられたりとする絶対も多くは此の類で、或る期間内だけの假定的絶対たるに過ぎぬ。さればとて、人は、到底絶対の達し得ぬものであるからして、連續を追ふ事を廢すべきでは無い。能ふ限りを盡くして、無限の連續を追ふべき筈のものだ。

第二百一十一節

現在の科學は、前代に比較すれば頗る進歩したもので、宇宙を有機體として説明し始めるまでになつて居る。凡らゆる科學が、皆な斯の程度に達して居るに、或は曰ひ難いかも知れぬが、既に知られてある約一億の星が互に密接の關係を有し、是等の星に關聯せる大小の物象も亦、互に關係あるものとすれば、宇宙は或る統一の下に秩序を有して自ら運營する有機體であると觀るより他に法が無いでは無いか。今日に於ける科學の趨勢より判斷すれば諸科學は、實に相率ゐて宇宙の有機體なるを證明せんとするもので、既に少くとも其一端を證明し得たる科學もあるが、今後は愈よ多くを證明し得るやうになるだらう。然し、絶大なる宇宙を完全に知らうと

(第二百一十一節) 有機體としての宇宙

第四十二節
第四十六節
第五十節
第五十四節
節参照

いふ事は、能き得べからざる事で、結局、無限の連続を追ふに在るのだから、まづ此邊で満足、といふまでの解決を見るに至るのは、地球が冷却して人類が絶滅してしまふ時期になつても、或は難しとする處だらうが、年々幾分宛なりとも、宇宙の事が漸次判明してゆきつゝあることは事實だ。従來の科學は、各専門の一小局部にのみ踞踏せし爲め、宇宙全體に關する渾一觀を得るに難かつたが、科學者も昨今は漸く其弊に氣付き、絶大の有機體たる宇宙の一部を研究して居るのだ、といふ事を覺るやうになつて居る。随つて、今後は、その昔漠然として宇宙の有機體なるを考へて起つた種々の汎神教などに縁らなくつても、科學的攻究法によつて、宇宙の有機體なるを證明し、人類が此の絶大なる有機體たる宇宙に於て、如何なる位置を占むるものであるか、を明かにし得るやうになるだらう。

第二篇第三章
第四章參照

今日の可知的宇宙は、空間に於て銀河を以て限られて居るが、銀河同様のものが、今日の可知的宇宙の外にあるものとも考へ得られる。又、時間に於ても、星霧を以て

始まり星霧を以て終るものこせられてあるが、星霧以前及び星霧以後に、何物かの存する事をも考へ得られる。つまり、宇宙は無限で、その究極へは、空間に於ても時間に於ても、到底、達し得られぬものであるのだ。然し、今日までに知り得たる處を以て判断すれば、宇宙が、全體として有機體を形成し、力に於ても組織に於ても、所謂生物を遙に超越せる生物以上の絶大なる生物である事を認め得ざるを得ぬのである。されば、所謂生物に生命ありとすれば、宇宙にも亦生命若くは生命以上のものゝある事に想ひ到らねばならなくなるが、さて其の宇宙にありとせらるゝ生命以上の生命とは何ぞや、この段になれば、所謂生物にありとせらるゝ生命の何であるかさへ判明せぬ今日、無論之を充分に闡明し得べきでは無い。然し、所謂生物の生命に關する知識が進んで來れば、宇宙にある生命以上の生命に關する知識も亦随つて、判明し來るに相違ないのである。所謂生物の小さな生命に關する知識が進んだからこゝで、宇宙と稱せらるゝ絶大なる生物の大生命に就ては、素より僅に其一部を知り得るに過ぎぬだらう

第八十一節 參照

が、宇宙の決して所謂生物より劣るものでなく、却て遙に優るものである事が知れ渡る様になるだらうと思ふ。生物は、或る星の成分の變化に伴つて起つた現象で、その生存期間にも限りはあるが、宇宙は無数の星の集合して出来たもので、その活動は何時止まるべしとも思へぬ。斯く宇宙が絶えず活動するのは、常に生命あるに因るものか、或は又その間に死の如きものもあるものか、或は所謂生死の域外に超越するものか、その邊のところは、猶ほ不明だが、何れの方面より考察しても、宇宙を死物なりとは謂ひ得べきで無い。必ずや其間に絶えず新陳代謝が行はれて居るものと、考へざるを得ぬ。かく、考へる結果は、宇宙に永遠の生命がある、この結論に達し、所謂生物の生死は、この永遠無限なる宇宙の大生命に關係のあるものだ、といふ事になる。然し、所謂生物の生死と宇宙の大生命との關係は何であるか、生物の生死は何を宇宙の永遠ある大生命に寄與するか、といふことになれば又不明瞭に陥らねばならなくなるが、斯の事實だけは、否むわけにゆかぬ。

(第二百一十二節) 認識する者の現狀

第二百一十二節

森羅萬象は、皆互に相關聯するものである。生物の生死するものも、無限より無限に到る連續の間の一部分を占むるに過ぎぬものだ。随つて、各科學が進歩し、宇宙の事理が明晰となるに伴れ、宇宙に於ける人類の位置も判明し、之を明瞭にせんが爲め、人は益々諸科學の進歩を望むやうになるだらう。科學は、今日の多くの人々によつて誤解せられて居る如くに、單に星辰の遠近や山川草木の形質を研究するのみを以て任務とせず、若し宇宙が人間の疑問となつて居らば之を解き、若し人生が人間の疑問となつて居らば之を解くやうにせねばならぬものだ。無限の宇宙には、眞とすべきもの、美とすべきもの、善とすべきものが多い。人の生死は、無限の連續の間に於て、この眞、美、善に關係のあるものだ。否な、これ以外のものにも關係があるかも知れぬ。是等の事に就ての詳細なる解説は、後世に至らなければ判明せぬものだ、としても、今日まで研究して得た結果を綜合すれば、人生が、少くも眞、美、善に關係のあるものたる事文は確になる。一輪の花、一疋の蟲さへ、之に就て精細を

知り得る事が困難で、人間の代々追ふて居る連続は、錯綜の上なく、之を追ふに随つて益々廣く、愈よ複雑なることが明かになるものだしたら、一人の人間ばかりが如何に力んで試たところで、宇宙の事は急に明白になるもので無い。漸進を要する。多數の人々の協力を要する。多數の人々が協力し、數萬年數十萬年、致々ミして倦むことなくば、宇宙の事も或は、今日、人體に就て知つて居る程度ぐらゐの處までは明瞭になるだらう。是に於てか、認識する者も、認識の連續を追ひ、全體の原生界より其一部たる副生界に及び、副生界より更に其一小部なる人類に及び、人類より又更に其の一微子たる自己に及ぶやうにすれば、意識が漸次明瞭になつて來て、無限の間、無限の時間のうちの或る一處、或る一刻に於ける自己の認識する處は、斯く々々のものであると認識せざるを得ぬ事になる。此の如く、認識する者が、認識の無限連續を追ふて居る間に認識する處のものうちには、無意識に得られるものもあれば、又有意識に得られるものもあるだらうが、孰れにしても、之によつて宇宙の概念を漸

次明瞭にしてゆくことは、確である。さて、今日に於ける宇宙の概念の内容が如何なるものであるか、と云へば、本書「宇宙」全一卷の巻頭より叙し來つた如くに認識せられて居る——更に切言すれば、自分（明治四十一年十一月の三宅雄二郎氏）は、本書「宇宙」全一卷に叙べたる如くに認識すると曰ふより、他に語を持たぬのである。本書「宇宙」全一卷は、認識の何たるかを闡明せんご試みた認識論の書では無い。斯く認識する迄には、如何なる順序によつたものであるか、を認識せんごしたまでである。然し、素より之によつて満足すべきではない。認識する事の如何なるものであるか、をも究めて之を認識したく想はぬでも無いが、既に認識した處が頗る多いのであるから、まづ夫れより先に之に整然たる順序を立て體系を作つて置かぬと、思想の混雜を來すことになる故、本書「宇宙」全一卷に於ては、大にして遠きに亘る星系を如何に認識して居るかに就き、稿を起し、漸次小さくして近きにあるものに推し進み、更に細に入り、人類の意識に達したのである。故に本書「宇宙」全一卷に載せてある處のものは、

天下に於ける唯一無二の渾一的宇宙觀である、さ云ひ得べきで無いが、一種の渾一的宇宙觀——少くとも、明治四十一年十一月(「宇宙」の脱稿時日)に於ける日本帝國の臣民三宅雄二郎の渾一的宇宙觀である。

第二百十三節

本書「宇宙」の巻頭より叙べ來つて、茲に至つた所のものは、現代に於ける人々の意識に顯れた認識を統合して認識し得たる渾一的宇宙觀であるが、その間には素より疑ふべき餘地もある。否な、その一小部分に就てさへ、疑ふべき點が無いでも無からうが、凡そ連續なるものうちには、既に經過してしまつた部分と、將來に於て追ふべき部分とのあるもので、現在は連續のうちの、過去に屬する部分と將來に屬する部分との中間にあるものだ。過去に屬する部分の連續に關しては、現在に照し推理によつて、信するより外に法がない。將來の部分に關しては、如何に現在に照して推理しても、たゞ疑ふより外に法が無い。現在は、過去と將來との中間にあるのだから、又隨つて、信疑の中間にあるものと云はねばならぬ。若し、現在に於て

全く疑が無くなつてしまへば、進歩は停止されてしまふことになる。世間には絶対に達して全く疑無きに到らんとし、頗る努むる者もあるが、人限は無限の連續を追ふて居るものである限り、斯くの如きは、望んでも得べからざる事だ。假りに之に達し得たりとする者があつても、常人或は其時代だけのことで、或は他人より觀、或は後代より觀れば、絶対に達して居らぬことになるものだ。故に、人は唯、比較的疑の無い處に向つて進んでゆきさへすれば、それで可いのである。かく、比較的疑の無い處へ進んでゆくには、勿論、何處から出發しても亦可いわけになるが、既に過去の連續を繼承し、多少の知識を蓄へて居る今日、過去に溯つて考へ、現在に照し、以て將來に及ぶのが、便利の法である。然し、過去に徴してする判斷とても亦、悉く當るものには限らぬが、大體の上から稽へれば、假令、過去に於て一進一退一盛一衰があつたにしても、連續の増進は否定し難く、認識の範圍は、時代の進むと共に愈よ大なるものに及ぶと共に、愈小なるものにも及び、不明確とせられたことが、

日に月に明確になりつゝあるを認めざるを得ぬのである。猶ほ、過去に於ける連續増進の結果によつて判断すれば、實驗を主とする觀察が、推理と相合して一致協力した時には知識が進歩し、兩者の離れた時にも、其間に多少の想像が挿まつて來て、却つて或る程度まで、認識の増進を助けた形跡も無いでは無いが、觀察と推理とが餘り隔絶した時には、認識の増進が害されたことになつて居る。故に、推理は認識の増進に須臾も缺くべからざるものではあるが、成るべく觀察より遠ざからざるものにして置かねばならぬ。然し、甚麼せ、小さな星の上に蠢動する人間の力で爲すことゆえ、如何に精巧の器械を用ひたからとて、觀察には限りのあるものだ。随つて、充分なる觀察を遂げた上で無ければ、宇宙に關する渾一觀を得られぬものとする、全然渾一觀を作り得られなくなつてしまふ。されば不完全ながらも、渾一的宇宙觀を作らうとすれば、其間に多少の想像を交えねばならぬことになる。本書「宇宙」全一卷に多少の想像を加へた跡のあるのも、之が爲めだ。されど、想像は決して妄りに恣にすべきも

是より第一
篇第一章に
歸る順序と
なる

のでは無い。想像にも科學的根據が無ければならぬ。苟くも科學的研究の結果であつたならば何處々々までも之を重んじ、想像によつて之を否定するやうなことがあつてはならぬ。知識の増進は、斯くの如き徑路を通るべきものと、先天的に定まつてゐるか如何かは、暫く疑問なりとするも、今日までに於ける知識増進の跡を尋ねて徴れば、實に斯くの如きものである、こ斷定せざるを得ぬ。人間は、まづ大體、斯くの如き順序方法で、宇宙に關して意識に顯はれたる處を統合し、不完全ながらも、各自の渾一的宇宙觀を得、以て幾分の満足を得るやうにするより、目下のところ致し方があるま

——(本文畢)——

跋

書を校訂するのは、恰も塵を掃ふ如きもので、或る處を拂つてらうちに、他の處へは又遠慮なく塵が積つて來る。幾回拂つても塵は盡きぬと同じやうに、書に於ても三回四回と幾回校訂しても、猶ほ誤脱のあるものだ、とは昔から言ひ傳へられて居る處だ。況んや書を著す事は、頭に想念の湧いて來、手に材料の入るに随つて筆を動かすものゆえ、一旦、筆にした後にも、新しい想念が湧いて來、新しい材料が手に入るに随つて、前に筆にした處を書き改めねばならぬものとすれば、幾回改削しても、遂に完成の見込が無いことになる。まさに完成した、ミ自ら認め得る著書でない、之を世に公にすることの能きぬものミすれば、著書は永遠に世に公にせらるゝ機會がなくなつてしまふ、永遠に公にしないものならば、それでも宜しいが、早晚一度は公にするものとしたら、完成した上で無ければ、公にすべきものでない、といふ理由

(荀子)趙の
人孟子に後
る、五十餘
年性惡説を
唱道せり其
著「荀子」は
素と三百二
十二篇なり
しも後重復
せるものな
除き三十二
篇とし唐の
揚雄が註の
を「荀子」と
な

跋

は、決してあり得べきものでない。世の中の在りと凡らゆる事物は、皆完成せぬものばかりである。故に荀子(西紀前三)も、天地に全功無し、即ち森羅萬象悉く未完成のものだ、と曰ふて居る。進化とか、進歩とか進取とか向上とかいふ事のあるのも、凡らゆる事物が完成して居らぬからでは無いか。萬事萬端未完成で、怒る者があつたり泣く者があつたり、大に笑つたりする者があるので、世の中は面白いのである。總てが完成されてしまつて完全無缺、怒る餘地もなく、泣く餘地もなく、笑ふ餘地もないものゝすれば、世の中は定めし面白味の無い空々寂々のものであらうと思ふ。自ら完全なるを得ずして、他人の不完全なるを笑ふが如きは、眇にして跋を笑ふのと、同じで、滑稽の上無しだ。或る人が公にした著書の不完全なるを觀て、之を嘲るのは眇が跋を笑つたり、下戸が上戸を笑つたりするのと同じで、自分の不完全なるを棚にあげて置いての沙汰である。然し、本書「宇宙」全一卷を公にするに當り、著者(三宅雄二郎氏以下同じ)が之に對し、果して改削の餘地無きものとして満足して居る

コスモスと
等しく菊科
に屬する洋
種の花に稱
して其名を
「宇宙」と
同義の「宇
宙」に通過
するに當り
無限の連続
なるを以て
「咲き初む
る」を著者
の語に著者
は著者の著
作の連続中
の歩を追へ
るものと過
ぎず意を寓
せる事猶ほ
ニユースト
の遺如し金

か、ご問はるれば、言下に斷乎して、満足して居らぬご答へる。その缺點は、他人よりも寧ろ著者自ら之を能く知つて居るのだ。かく、缺點を充分に承知して居りながら猶ほ之を世に公にするを憚らぬのは、完成を期せんとすれば限りなく、何時完成するものか、見當がつかぬからだ。されば、本書「宇宙」全一卷を世に公にするに至つたのは、本書の著者が傲慢で、斯る完全なる書は無からう、ご威張り散らして試たい爲めでも無ければ、又、大に謙遜して、是非、我が眼を啓いて戴きたいこの精神からしたもので無い。唯、世間普通の事のうちの最も普通なる事を爲すまでである。庭に植てあるコスモスの花の咲き初むるを觀ながら。

跋

解説者より讀者へ

縮刷
解説
宇

宙
畢

改

解説者 青柳有美

一。本書「縮刷解説宇宙」(以下同じ)に用ひてある曆年は、人或は事の東西を問はず、總て、西洋紀元に據つたものである。西洋紀元元年は、耶蘇の實際誕生した歳に後ること四年、我が神武天皇即位紀元六百六十一年に該當する。

一。原本(政教社藏版「宇宙」以下同じ)にある頭註は、概ね之を本書の本文中に繰込むであるが、そのまゝ之を本書の頭註に据ゑて置いたものも、六七個處はある。又、本書の本文にも繰込まず、本書の頭註にも据ゑず、全く省いてしまつたものも、八九個處ばかりある。

一。本書の各篇各章各節に於て、何處までが原本の原文を其儘に義翻したもので、何處からが解説者を加へた説明であるか、之を明かにして無い。否な、明かにし得られなかつたのである。互に錯綜した處に、本書全體の結構がある。爲に、解説者の不

敏く無學とを以てして之に加へて置いた説明が、原著者(三宅博士、以下同じ)に、累を及ぼす恐れ無しも限らぬが、讀者は須らく過誤を解説者一人のみに歸し、累を原著者に及ぼすべきで無い。

一。本書本来の性質よりすれば、本書の本文は原本の本文を、單に通俗に義翻するのみに止め、説明は總て之を頭註に繰込むべき等のものであるかも知れぬが、頭註の爲に使用し得る紙面の積は頗る狭隘なるに反し、説明を要する事項は頗る多い。依つて説明をも本文中に繰込まねばならぬやうに止むなくされたのである。

一。本書の頭註は、主として本文(本書の)中にある語若くは事物の説明と、本文を一層明瞭に理解し、讀者に疑義を生ぜらしめんが爲めに、學者の意見或は研究の成果を引照したものとである。原本の本文そのものに對する直接の説明に至つては、概ね本書本文中に繰込むのであるが、各節各行の上にある頭註が必ずしも、その節その行に該當するものではない。紙面の都合上、後行後節の部にある頭註で、前行前節の頭註

になつて居るものもある。中には原本の本文に載せられたもので、本書の頭註に移した場合も二三個處ばかりある。

一、片假名で外國音を綴つた下に括弧によつて挿入してある歐字の發音が、假名の發音と多少異つてる場合が二三個處ある。これは、原著者が主として獨逸語に據られたるに反し、解説者には獨逸語の素養乏しき爲め、主として英語に據り、原著者が獨逸音で綴られた片假名の下に、その語義に該當すべしとせらるゝ英語を挿入したからである。

一。人名には、其人の國籍と生(或は歿)年とを附記したが、再記以上のものには附記せぬことにしてある。又、現存者で其の生年の詳ならざるものには、その職業を附記することにしてある。原本に載せられてある人名で、解説者の寡聞なる爲め、その人を詳にする能はず、止むなく木書に省略したものが全巻を通じて二三個處ばかりある。原本の片假名によつて、洋人名の歐字綴方を知るのは、決して茶飯事で無い。

解説者より讀者へ

4
一。第一篇及び第二篇、殊に第一篇の解説に従事中は、解説者に於て、力めて原文（原本の文、以下同じ）を約め、之に含まるゝ意義を抽出せんとするに骨折つて試したが、第三篇以下第五篇に亘つては、解説者の力量を以てして、到底、其事の不可能なるに想ひ到り、稍々冗蔓の趣あるほどに、原文を其儘追ふて解説することにしたのである。殊に第四篇の第二章を占むる認識論の歴史に關する部分の如きは、原文の約二倍以上になつて居る。それでも猶ほ、讀者をして充分に理解せしむるを得るや否や、解説者の自ら疑を存する處である。

一。原著者の文は、假名交り漢文體の、簡潔にして併も頗る莊重、何となく權威があつて、言外に廣い意義を持たしたもので、讀者をして或る程度までは、如何やうにも解せしめ得る如き餘地を存してあるが、解説者は之を總て通俗の口語體に義翻して説明を加へ、言外の意義をも捉らへて之を文字にするに力め、讀者をして讀んで直に覺り易からしめんとしたので、本書の行文は、莊重を缺くと共に、往々にして皮肉の

氣味があつたり、又、斷定に過ぎたり、稍々亂暴な調子に流れたやうな處もある。之が爲め若し、解説者が漫りに、原著者の思想を忖度して累を原著者に及ぼすものなりとの譏あらば、解説者は其の咎を甘受する。

一。本書各篇の標題は、總て標題を用ひず、之を變更して通俗に義翻したものであるが、その横には、原本のものを、そのまゝ括弧にして挿入してある。本書各章の標題も、殆ど皆な原本の標題を用ひず、之を通俗に改めたものであるが、其頭註として、原本各章の標題を据ゑてある。中には、原本の章標題そのまゝを本書の章標題にしたものもある。本書各節の冒頭と註には、原本の目次に記載せらるゝ各節の標題と略同じきものを据ゑ、之を節標題とし、其節に含まるゝ要旨を抽出することにしてある。

一。原著者は、其博聞博識と、腦力の非凡なる點とに於て、當今その類無しとせらるゝ天下の碩學である。その人によつて著された「宇宙」の如き種類の書を解説する者は、若し之を完全にせんとせば、少くとも原著者と同一程度の知識と腦力とを有する

6 ものでなければならぬ。然るに、本書の筆者たる解説者の知識と腦力とは、之を原著者のそれに比すれば、大洋の一滴、九牛の一毛の如きものである。解説者の原本「宇宙」に對するや、恰も一小星の表面に蠢動する渺乎たる人類の身を以てして、廣大無邊の宇宙に對するやうなもので、到底その悉くを理解し得べきでは無い。たゞ今日の解説者が、今日の場合に於て盡し得る限りの力を盡して、之が解説を試みたのみである。或は誤解が無いとも限らぬ。

政教社の藏版で、明治四十二年一月の刊行にかゝる「宇宙」の解説出版に關する認諾は、原著者三宅博士によつて、解説者の雇主にして本書の發行者なる野依秀一と解説者たる青柳有美とに與へられたものであるが、三宅博士は、假令些少なりとも、此の解説及び之が出版の事業に干與するを肯ぜられなかつた。又、實際に於て、寸毫も干與せられなかつたのである、其の理由は、一たび之に干與すれば、全卷を通じて校閱

せざるべからざる煩を生じ、斯くの如きは事情の許さぬ處であるから、こゝに於て。

7
 原本「宇宙」は、現代、少くとも明治四十一年末までの凡ゆる知識を材料として網羅し、之を綜合して整然たる體系に組み立てたもので、數學、力學、星學、氣象學、地文學、地理學、地質學、礦物學、土壤學、化學、物理學、植物學、細菌學、動物學、古生物學、生理學、解剖學、醫學、人類學、考古學、社會學、統計學、進化論、心理學、認識論、倫理學、論理學、哲學、文學、宗教、世界史其他百般の學術其歴史、美術、工藝、産業等、苟くも人類の状態と知識との進歩に關係あるもので、原本の材料になつて居らぬものにては無い。併も、それがバビロニヤ、印度、希臘、希伯來、支那、埃及、墨西哥、秘露の昔より、最近に於ける世界各邦の事に及んで居る。のみならず原文は力めて冗蔓に亘るを避け、カントよりヴントに於ける認識論の歴史が、僅に二頁に收められてあるといふ如き程度の、頗る簡潔のものにしてあるので、之に原著者の省略せる説明を加へて平易に解説し、一般讀者に解せられ易きものとし、原著者の

意を誤り無く傳へんことを、解説者の微力を以てして甚だ難しとした處である。原著者は、原本の題言に於て、原本「宇宙」に顯れたる全體の理路を辿り、直に現實なる宇宙に融合し得るものは、「宇宙」の著者その人の外には恐らく他にあるまい、と曰ふて居られるが、解説者たる予は、少くとも自分だけでは、「宇宙」全卷を徹頭徹尾理解し得て、その間に顯れたる理路を、迷ふこと無く辿り了せたる、原著者以外の他の一人者たるを信するものである。随つて、本書は餘りに杜撰なる解説書なりとの譏を受けず、少くとも或る程度まで誤りなく原著者の意を傳へ、原著者が原本に省略して置いた説明をも補填し得たるものと信する。

解説者の知識と腦力とは、到底、原著者に及び得ずとする處である。それにしても、若し、本書の完成に時間の制限なく、解説に必要な参考書は、その數を問はず其價格を問はず、悉く之を解説者の手許に蒐集するを得、なほ解し難きものあれば、之を各其専門の學者に就て訊すか、或は各所の圖書館に就て調査するを得る餘裕ありし

とせば、本書よりも多少完備せる解説書を刊行するを得たかも知れぬ。然し、予の雇主が予に本書を作らしめ、之を發行するのは、半ば營利の爲めである。予が際限なき時間を本書の解説にのみ費すのを許さうな筈が無い。又、予は解説に要する材料として、高價なる書籍を數多く寄せ蒐めるわけにもゆかず、多くは、予の貧弱なる藏書と新に購ひ寄せたる最も廉價なる十冊内外の書とを参照したのみである。

本書は大正四年六月十三日稿を起し、十月廿四日を以て脱稿したもので、其間約五ヶ月を経過して居るが、實際に於て予は、本書以外に猶ほ雇主より與へられたる「實業之世界」「女の世界」等の雑誌の上に爲すべき任務が多いので、本書の爲に専ら費すを得たる正味の日数は、一ヶ月中その半なる約十五日内外、通計七十五日内外たりしに過ぎぬ。この間、予は多少の勤勉を試み、一日約九時間を全く本書の爲に費し、茲に完成を見るに至つたのは、些か欣快を覺ゆる處であるが、専門學者を歴訪して疑を訊したり、圖書館通ひをする時間の餘裕は絶対に無かつたのである。素より原著者

10 三宅博士を訪ふて、親しく疑義を訊さんとしたことなどは、唯の一回たりとも無いのである。

斯くの如くにして、原著者たる予自らすら本書に對しては、不満足なる點が決して少く無い。然し、原著者も曰はれて居る通り、人は常に周圍の事情に牽制せられるもので、全く之を脱するわけにゆかぬものである。況んや、予の如き鈍根と無知とを以てして完成した本書には、定めし原著者に於ても、讀者に於ても、不満足に感ぜらるゝ處が多からうと思ふ。之は是非有して戴きたい。

解説に當つて、殊に予の最も苦しんだのは、支那に關する事物と認識論に關する部分である。幸にして支那の事物に關しては、同郷の先輩山方香蜂氏の教示を受くるを得、略之を明かにするを得たと信するが、認識に關する部分は、解説者たる予に取つて全く新しい問題で、今回本書を作るに當つて、始めて取扱つたものである。本書發行の企てがあつたのみで、まだ解説に着手せざるに先だち、雇主及び其他の二三

子よりは認識に關する部分を省略するを得策せせずや、この勸告を受けもしたが、予は之を潔しとせず、大に瘦我慢を起して之が解説を省略せぬこゝにしたのである。處が、實際、着手して試るゝ、果して非常な難物で、第四篇第二章を占むる「認識論の歴史」の一章の如きは、之が解説に五日間を費したのである。併も、能く原著者の意を傳へ得たるや、否や、今に於て予の猶ほ稍々疑を存する處である。然し、認識論そのものも、今日に於ては、まだ不徹底なるところの多い、漠として捕捉し難いものである。予の解説は五十歩百歩だ、こゝの或は僭越かも知れぬが、五十歩千歩の程度にあるものとして、讀者の寛恕を願ひたい。たゞ夫れ、この漠として捕捉し難い認識論の歴史を、カントよりヴントに至るまで、擧げて之を整然たる體系に組み立て、僅に原本二頁弱の間に收め得たる原著者の力量に至つては、凡才の到底及び難しとする處である。

哲人は、常に斷言者であると共に、又常に懷疑者である。原著者は哲人である。

12 「宇宙」に叙べられたる根本義に關しては、斷乎として明白に決定的の論議を敢てして居られるが、其他の枝葉に亘れば、殆ど決定的の言明をなされず、常に讀者をして疑を懐かしめ得る餘地を存する事にしてある、否、原著者は、自ら説きつゝ自ら之を疑へるが如き跡さへ、歴々として之を原本のうちに發見し得るのである、茲に、原著者と原本との特色があるのみならず、「宇宙」の一書をして遠達の趣あらしめ、言外に無量の意を持たしむる所以も、亦實に茲にある。哲人の著述として當然の事ではあるが、解説者は、原著者の言はんとして曰ふに躊躇し、稍疑を存し置ける個處に於ても、或る程度までは、決定的の解説を施してある。これは、讀者をして餘りに惑はしむるのを忍び無いやうに感じたからである。

終りに臨み予は、予の本書を作るに當り、予の爲に教授を惜まれざりし支那に關する山方香峰氏、佛教に關する高島米峰氏、星學に關する東京天文臺員、植物に關する理學博士三宅驥一氏、數學に關する跡見女學校教授上野熊藏氏令夫人イシ子、地理學

13 三宅博士は、加賀之國金澤の人、家世々醫を以て業とし、萬延元年を以て生れ、東

に關する早稻田大學講師小田内通敏氏、生命論に關する醫學士渡邊喜三氏、昆蟲學に關する理學博士三宅恒方氏、狂歌に關する坂井久良岐氏、獨逸語に關する向軍治氏、地質學に關する理學博士巨智部忠承氏、音樂に關する山田源一郎氏、煉丹に關する醫學博士二木謙三氏、航空に關する理學博士田中館愛橘氏、シヨウウに關する堺利彦氏、和歌に關する和氣律次郎氏、百科に關する安成貞雄氏及び二三に關する齋藤赤次氏及び安成二郎氏の好意を感謝するものである。以上列記の諸先輩は、何れも予の發せる往復葉書を以てせる質問に對し、概ね懇切なる教示を垂れられたる人々である。

猶ほ、本書の發行者たる野依秀一及び解説者たる予は、原本「宇宙」の發行權を所有する政教社が、その解説たる本書の出版を認容せられたるに對し、謝意を表すると共に、野依秀一と予とに本書發行の認諾を與へられたる原著者文學博士三宅雄二郎先生に、敬意を表するものである。

三宅博士は、加賀之國金澤の人、家世々醫を以て業とし、萬延元年を以て生れ、東

解説者より讀者へ

14 京帝國大學文科に哲學專修の業を卒へられしは明治十六年、明治廿一年杉浦重剛、志賀重昂、棚橋一郎、辰巳小次郎等諸氏と謀り「日本及び日本人」の前身たる「日本人」を創刊し、大正四年其齡五十六。文學博士の學位を授與せられしは、明治何年頃であつたか、爾んな事は問ふの要がない。號を「雪嶺」に申される。

大正四年十一月二十一日印
大正四年十一月二十四日發
大正拾四年六月十日改版卅二版印刷
大正拾四年六月十三日發行

【定價參圓五十錢】

著者

青柳 猛

不許

發行者

東京市芝區櫻田備前町七番地
野依 秀一

複製

印刷者

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地
天沼 藤太郎

印刷所

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地
英舍

發行所

東京市芝區櫻田
備前町七番地

實業之世界社

振替東京三三七〇
電話銀座七二一七

◇文學博士 三宅雄二郎先生著 (近刊)

世の中

四六判 約六百頁
定價 二圓八十錢
書留送料 二十二錢

「世の中」とは何んであるか。博學を以て一世に鳴る三宅雪嶺博士が、その「世の中」の生きた話を面白く且つ有益に説かれたのが本書である。人間と人間との間に生じる色々のいきさつを快刀亂麻的に解剖説明し、人をして自ら安んじてその行く所を知らしめる。宜なるかな本書一度現るゝや、讀書界爲めに沸騰し、「現代の論語」「二十世紀の聖典」の名を博し、大木伯の如きは「日本人は本書を得て興起するのであらう」と感嘆し、安部磯雄氏は「現代に適切なる論語以上」と極稱せられた。現代に生くる人は老若男女の別なく本書を一讀する必要があると信ずる。

發行所 東京芝区櫻田備前町三番 實業界之世界社

荒畑寒村譯述

四六判上製 定價 貳圓五拾錢
三五〇頁 送料 廿二錢

受難のロシア

新刊
嘗て我が國は、否全世界の國々は、勞農露西亞をいみ恐れて、恰かも百鬼夜行の闇黒の世界と做して居た。然し見よ、今日では我が霞ヶ關に勞農國旗翻ると共に赤都モスクワの空に日章旗輝く。我が國と露西亞とは再び友情を恢復して親密の度は日に増す有様。米國の挑戰的排日、それに迎合する英國のシンガポール軍港問題、——今や我が國の外交的地位は、日露の提携を必要としつゝある。此際、勞農國家に關する詳細なる知識を持つことは、我が國民の急務でなければならぬ。本書は米國ウイスコンシン大學社會學教授ロツス博士の著「ロシア・ソビエツト共和國」を譯述せるもので、譯述者荒畑氏は革命後のロシアに往復してロシアを實地に見聞せる人。題して「受難のロシア」と名づける如く、ボルシエギキ革命後の受難の外交史にして、從來虚妄の宣傳によつてロシアを誤解させられた我が國民は、本書によつて眞實のロシアを知ることが出来る。

發行所 東京芝区櫻田備前町七番 實業界之世界社
東京芝区櫻田備前町七番 實業界之世界社

◇長々會協一シンエシイフエ◇
著名二の生先郎四藤田池

能率
增進
科學的經營法

四六版箱入二五〇頁
定價二圓五十錢
書留送料二十錢

- 一、模範的工場は如何なる施設、執務方法を行ひつゝあるか。
- 二、勞資協調の精神、最も間違ひなき事業遂行法、其他應用自在なる實利的經營法を滿載す。
- 三、著者は本邦最初の科學的經營法紹介者にして、又能率問題の權威なり。乞ふ就て聞く所あれ。

無益の手數を省
秘訣

四六版上製三〇〇頁
定價八十錢
送料六錢

- 一、前内閣總理大臣高橋是清氏は我產業界當面の必要とし本書を推薦せらる。
- 二、我國の如くあらゆる方面に無駄多き國は少なし。本書は大工場、大會社に於て、廣く從業者の教育書として採用せられ、既に百數十萬部を賣り盡せる名著なり。

東 京 芝 櫻 田 備 前 町 所 行 發
東 京 芝 櫻 田 備 前 町 所 行 發

社 長 兼 主 筆 野 依 秀 一 氏
實 業 之 世 界

每 月 一 回 一 日 發 行 定 價 十 五 錢 送 料 二 錢

實業之世界は、野依秀一氏が二十四才の時創刊したもので、以後十八年間悪戦苦闘を続け、日本雜誌界のライオンとして、特異の地位を保ち來つた光榮を有する雜誌であります。

澁澤榮一子爵、三宅雪嶺博士、幸田露伴博士の諸先生は十五年間毎號本誌に執筆せられて居ります

その内容は實業界は勿論、社會問題、政治問題にも他の雜誌で見ざるを得ざる中正の論を堂々發表する點に於て、眞に力と生命に満ちた雜誌であります。敢て御愛讀を願ひます。

東 京 芝 櫻 田 備 前 町 所 行 發
東 京 芝 櫻 田 備 前 町 所 行 發

最新刊

我が赤裸々記 (自傳)

▼四六版特製 序文數十名 士本文二百七十三頁 定價一圓九十錢 送料二十錢▲

野依氏の無遠慮と卒直とは既に世に定評がある。氏は今その鋭鋒を自己の上に向け、最も赤裸々に最も露骨に自己の半生を語つたものが本書である。著者の波瀾万丈の経歴は現實社會のあらゆる真相を暴露し、社會の本體を語ると共に、人間の表裏を解剖して剩す所がない。絶好の人間記録である。日本第一の活動青年の記録である。要するに本書は日本人の著書として未だ會つて見ざる所の痛快著作である。本書の出版に際して宗教界、教育界、實業界、政治界、文藝其他の方面より數十名士が寄せられた序文は、又實に著者が社會に惹起した波紋の如何に多方面に亘り、偉大であるかを示す一種の社會的反應であると云へる。著者の信仰を諒解するとせざるとに拘らず必讀すべき良著である。

◇長々會協傳宣宗眞本日大◇
◇幹主界世の宗眞◇
◇長々社界世之業實◇

著一秀依野

私はかう眞宗の信者になりました

著者は獄中に於て眞に自己の實相を自覺した懊惱苦悶の極、遂に絶對他力のお慈悲に救はれた。本書は即ちその入信の顛末を述べたものである。

定價 金十二錢
送料 六錢
▲百部以上 九十錢
▲五百部以上 九錢
▲千部以上 七錢

◆理學博士 石川千代松先生著

▼四六版三百頁▼定價貳圓五拾錢
▼裝幀堅牢美本▼書留送料二十錢

アメーバから人間まで

世界的の動物學者石川博士が「アメーバから人間まで」の進化の過程を、恰かも我が子に話すやうな調子で、極く平易に書かれたもの、假名の讀める人なら一讀誰でも人類發生の由來と人間の正體が手に取る様に領れます。

内容目次 ▲地球と宇宙と人間 ▲自然生出 ▲最初の生物 ▲細胞 ▲原生動物 ▲細胞群と分業 ▲後生動物 ▲組織器官 ▲運動及び運動器官 ▲感覺及び感覺器官 ▲求食、泌尿及器官 ▲本能、智能 ▲生殖、發生 ▲個體、群體、共生、共棲、家族、社會、國家 ▲變異、遺傳 ▲進化、退化、死 ▲人間と動物等

八 版

◆發行所

東京市芝區櫻田備前町七番地
振替口座東京五八五七七

秀文閣

大日本眞宗宣傳協會 東京市芝區櫻田備前町七番地 振替口座東京五八五七七

人エ/T-21

◇實業之世界社長
真宗之世界主幹

野依秀一氏著

上下
二册

四六版上製箱入
定價各二圓五十錢
送料 二十二錢

絶對の慈悲に浴して

焦燥と不安は最も濃き時代色である。富者も美人も若人も、今や人生は悩みである。如何にして此の人間苦、この生活苦より逃れんか？偉大なる黄金力も、最新科學の粹も、習俗的説教と等しく、近代人の煩悶を救ふには足りぬ。吾人に唯一の慰安は幾度か失敗を繰返し、最後に安心を得た常人の體驗、その血涙にじむ平凡人の記録である。此の意味で本書は砂漠的人生の綠林である。

『上編』は著書が四年の獄窓裡に人生真意義の發見に非常なる苦悶懊惱の極、遂に胸中一點の新光明を發見し、信仰に再生するに到つた信仰獲得記であり、
『後編』は最も平易に且つ大膽なる徹底信仰の記録である。

大日本真宗傳宣協會
東京市芝區櫻田備前町
九三二番七

終